MAR. 189
no. 420

女學雜誌

明治廿九年

三月刊行

第四百二十號目次

私立明治女學校新築費募集の告白

明治女學校は今を距ると十又二年(時正に明治十八年八月)世間未だ吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧げて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ困厄窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すと一百四十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏(其の名を公にするとを好み玉はず故に明記せず)尤も同情を垂れて内外の助勢彌よ加はり、此年に至て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂げ前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今茲二月五日、隣家火を發し不幸類燒の厄に會ひ、校舍別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素より一敗の故に挫折すべけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれるとを覺ゆ、即ち彌よ奮つて倍々斯道の爲に鞠躬盡力せんとを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地内の殘舍を假用して授業を續くるとを得、災後十日既に讀書の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んとを熱望すると太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんとを望んで他意なきの情懷を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんとを謹て切願す。

東京麴町區下六番町六番地

私立明治女學校々長

明治二十九年三月 巖本善治

女學雜誌

第四百貳拾號

明治二十九年三月二十五日發兌

社説

内助論

猛烈なる獅子を容易に倒すものは、身中の蟲なり。此の蟲、至つて微なりと雖ども、其の内部に竄入せるを以ての故に、能く巨大の獸王を左右することを得。斯の如く、尤とも能く人を左右するものは、常に其の懷に於てす。物品に於ては、懷中の貨幣子なり、人に於ては、懷抱せらるゝ赤兒なり、生命に於ては、即はち脈々たる鼓動を元起すべき其の心臟なり。此を以て、尤とも能く他を動かすものは、必らずや先づ其の内心に入る。單に皮膚の淺薄に泥着し、若くは、輕骸浮影の外に滞こふることを爲して、而して直ちに其の心臟に入らざる時は、遂に能く大いに動かすことあるなし。戰に於ても然り、事業に於ても然り、雄辨に於ても然り、至情を人の腹心に措くに於ても亦然り、男女相伴なひ、伉儷相助くるの道に於てや、即はち殊に然り、所云る内助の効力なるもの、當に此の消息の通ずる所より發作すべき也。

古へより婦人が内助の德を論説せしもの舉て算すべからず。或は之を戰時、敵に對向したるものゝ味方の助力に比べ、若くは、之を城廓の應援に喩え、又は影の形に副ひ、裏の表に着き、陰の陽に應じ、文の武に和するに對較するなど、解明詳説、到らざるなし。而も、往々にして最緊要の一事を漏遺するもの多きは深く惜しむべき也。

夫れ、婦人内助の効力は、其の室家閨房の内に於ける助力をもつて最大となさず。もし之を以て最大とせば、其の効驗の及ぶ所ろや狭しと謂はざる可らず。男子、家を出づれば忙々焉として家を忘る。征衣の人旅天に郷雲を望むの時にあらざれば、執務役々の間だに尚ほ家を懷ふものは殆んど稀なり。既に家を忘れて、亦家人を忘れ、家人を忘れて亦た家房閨中

の助力を忘るるもの、何んぞ必らずしも情交の薄きが故とせんや。彼の單に室家に於ける内助の効力をのみ感知せる男子に於ては、出でて暫らく其の夫人を忘れざるものは甚はだ尠なかるべし。

惟ふに、婦人内助の最大なる効力は、斯の如き狭小なる境域にのみ止まる可らず。眞に其の効力の最大なるものは、偏局して其作用を室家の内に專ばらにするの時にあらず、即はち直ちに良人の心懷に入り、其の情緒意思の中に同化し、彼が品想と、彼が感覺との中に融和し、以て實際に同伴の靈用を爲すの時にありと言ふべし。

蓋し、智性上の判斷は、多くは經驗より來る、之を事務に施こして一々利害の輕重を量るの事は、日夜親から其要路に當るもの丶外は、多くは爲しがたきの務とす。爲すも、遂に要緊を得ざるもの比々として然り。此邊の處置に於て、男子たるもの、豈に多くの利益を其夫人の内助より享受するとあらんや。これ、其夫人の賢ならざるが故にあらず、但だ其の要路に當らざるが故也。要路に當らざる人の意見は、其の女子たると男子たるとを問はず、大率ね緊節に中るとなし。尤とも能く此の緊節を揣摩推察するものは、即はち責任を負ひて任に當れる現役者これ也耳。左らば、男子たるもの、豈に此邊の効力に於て其夫人の内助の益を享受すと言はんや。

其の享受する所ろは、斯の如き智性上の事務的判斷の上に存せずして、即はち、其の感情、及び德操に關はるの事に於てとなす。若し夫れ、情操高潔眞實率直にして、苟くも不義を受けず、苟くも正義を曲げざるの活ける人物ありて常に同伴し、而も此の人や、無上の熱愛と、純粹の貞誠とを寄せ、一身を許し終生を托して以て單へに良君の大丈夫たらんとを熱望すとせば、此の高潔なる情操と、此の至貞なる熱愛とは、遂に夫れ何の暇まあつて、男子の心胸より忘却せらるるとを得んや。彼は、家に歸りて初めて慰樂を享くるにはあらず、彼は閨房に入りて初めて元氣を鼓舞せらるゝにはあらず。彼や、世波の暴濤中に押もまれ、敵者滿罵の中に立ち、人情の惡氣に呼吸しつゝあるの時、即はち寂寥として意識するとき、憤然として怒るとき、忽然として人のつれなく、わぢきなきに觀ずる時、同時に憶起して則はち忘る可らず、欺むく可らざるの明白なる事實「一個の義人、熱愛を以て、貞操を以て、

一身を與へて、水火死生の內に同もに共もにせんとしつゝあるの事實」、眼前胸頭に歷々として現はれ來らんには、多情多恨の男子たるもの、如何んぞ踴躍欣舞して直ちに復活せざるを得んや。即はち是れ、心中つねに同伴しつゝある眞正內助の人の、眞正の內助の最大効力あるの機會なり。

嗚呼、同伴なる者、此に至りて眞の同伴なり。內助なる者、此に至りて眞の內助なり。心中尤とも奧深き處に助く、是れ最上の內助にあらずや。何處何如なる時にも同伴す、是れ最上の同伴にあらずや。人生朝露の如し、肉骸を抱いて偕老の契りを全くせんと欲するものは、遂に過半は落心せん。流水去つて跡なく、落花散つて影を失なふ。頼むまじき容顏風色を慕ひて、あだなる交はりを永久に期せんとするは哀れなり。及かず、胸底斷えず、姿をとゞめ、赤心常に之と同伴せんには。若し斯の如くんば、肉の亡ぶるは、即はち靈の擴張する也。故人の姿消えて、則はち故人の靈や周ねく現はれ、時處位の制裁を脫離して、吾が感覺に常に存在せざるはなし。斯して、不斷、之と同伴し、之と不斷同伴して、限りなく其內助を得ば、身先づ亡ぶと云ふと雖ども、寧ろ永遠に存在すと思惟せられん。あゝ、伉儷の契りなるもの、豈に肉身の失すると共に失せべきものならんや。左らば、即はち、內助の効力なるもの、斷じて、木材より建られし家、皮膚もて包まれし身躰のみの區限する所にあらざるを知る可き也。

女學

繼母の地位

山下石翁

まゝ母、まゝ子と言へば、人直ちに厭ふべき感覺を生じ、春花忽ち落ちて寂寥たる秋の哀れを覺ゆるの心地せらるゝものなり。世には、まゝ子いぢめ、又は、まゝ子の僻み根性など云ふとあり、屢ば耳にする所ろにして、人生の不快之より甚しきはなし。左るにても、まゝ母たるもの悉とく惡女にはあらず、反つて普通以上の器量心得あるものを撰ぶは、未亡夫が常に覺悟する所ろなれば、十人のまゝ母が十人とも世の風評に上るほどの惡女たりと言ふは、信じがたきとなり。然るに實際世間の評判、とかく此の數を免かれざる所以のもの

は、必らずや別に免かれがたき理由の存するありての譯ならん。

世人は、まゝ子に同情を寄するもの多くあれども、まゝ母に同情を寄するもの至つて少なし。義理ある母が、其の義理ある子を眞實の産みの子同様に取扱はぬとて、直ちに之を酷評するものあれども、抑そも、自から産まざる子を自から産みたると同様に感覺するヿは、本來至難の譯にて、聖人君子と雖ども、容易に企だて爲すヿの出來ざるものたるヿを知らざる可らず、世人は先づ此の至難の事由を辨ぜずして、而して直ちに人に至難の事を求めんとする也。之をまゝ母に同情薄しとは云ふ。必竟、繼母繼子の間の不折合は、主として此の世人が同情の薄き所以に因るヿ多し。

素より世間幾多の繼母の中には、賢良なるものもあり。其の繼子に對する處置、一々義に適ひ、傍觀者をして感服せしむるヿなきにあらず。若し、世間一と通りの批評より之を察すれば、即はち五分の點の打ち處もなきものにして、好くも斯く行届くもの哉と歎賞せらるべき價値はあるべし。

然し乍ら、眞の親子の間だ柄は、自然にして無意識なるを最良とす。親は其の慈愛を感覺せず、子は其の孝心を感覺せず、外見する所ろ、隨分、亂暴なる取扱ひもあり、亦た我儘なる行跡もある中に、自然に慈愛孝行の美なる本性煥發して、天眞の爛熳たるうちに親子の極情を露はすものなれども、彼の繼母繼子の間だ柄に於ては、其の尤とも善しと評判せらるゝ處に於ても、双方に各自の行ふ所の處置に於ける自覺意識なるものなきヿを得ず。即はち、母は、義理ある子なればとて、謹んで義を行ふものにて、其の克己忍耐は如何にも感服の外なけれど、扨て其の感服せらるゝ丈けに、母自己の心中に於ても同様の感覺あり、之れ丈け行ひたらば、人々に於ても何んと申様もなかるべしと思惟し、既に自己の心中に其の自負と自覺とあるヿなれば、固より天眞自然の情愛によつて自から滲ずる如き姿はある可らず。

母の方にて斯の如くなれば、子も亦た同様に感覺し、義理ある母が斯く迄に愛し玉ふヿと思ふゆゑに、一層ありがたく、爲めに、我儘を制し、謹愼ぶかくなりて、年に似合はぬ發明利巧の人となるべし。普通の傍觀者をして感服せしむるものなれども、抑そも子供が其年にまさりて利巧なるは必らずし

も善きことにはあらず。子供は子供相應の我儘もあるべきことにて、此の我儘が反つて他日の圓滿なる大成を成就すべき譯なるに、此子早く母の義理に感激して、年不相應にませたる心を起し、一々己を制して思ふ存分の天眞なる所行なきが故に、たとひ其の謹直と、利巧とは、俗人の目を欣こばすに足るとも、眞との教育者としては、眉を縮めて心配せしむべきものあり。此子、元來、無意識に此の品德を養なひしにあらざれば、他日の究屈不自然なる品性に流れべき兆し既に此時に發生したりと言ふべし。

蓋し人世立身の秘訣は、其の智力もしくは技量によること寧ろ少なくして、其の温厚善良の氣質、眞とに人に好かれ、人に賴母しく思はるゝ品德あるの故に因ること多し。然るに、少き時より、義理づくめの養育を受け、遠慮氣兼の内に人となり、絶えて心一杯を發表したることなき者は、成長して后も兎角人との交際圓滑ならず、始終打とけぬ姿にて、何やらん物事を秘くす如く見え、究屈不自然にて、大抵は人に嫌はるゝものなり。夫故、たとひ技量ありて人の上に立つものとなるとも、人心服すること薄く、友と交りて相應の實義はありとも之と親しむことは甚だ淺きもの也。これ實に一生涯の大損にて、立身出世の故障言ふ迄もなし。然るに、其の遠因は、家に實母の温たかなる養育を受けざりしが故にあること、屢ば世間にて聞見する所ろ也。

左れば、繼母繼子の間だ柄に於て、其の最上立派なる心得を双方にて實行し、他人より見ては申分なき程に甘まく齊のひたる如く見ゆる家庭にても、之を實の親子の間だ柄の感化に比較するときは、雲泥の差あるもの也。夫れ、最上の心得あるものの間柄にてすら斯の如しとせば、其以下、見にくきものに於て非常の悪結果を生ずることは言ふ迄もなし。

繼母繼子の間だ柄に、美なる結果を得ること難き所以は前述する如く當然の事と言ふべし。如何なる大人物にても、義理の子に對して實子同樣に感覺することは出來がたきものなるを、すべての繼母に向つて直ちに此の至難なる注文を爲し、此の注文の通りならぬとて直ちに罵しつて之を酷評するに至つては、傍觀者の酷なることも亦た甚しと言ふべし。古へより、無念無想の鍛練を爲し、無我の大悟を得て、彼我の關係を忘れ、融然和して親交せんとすることは、道士賢者の頗ぶる苦心

せし所ろなれども、其の修練の難きとは、徹底せし人の殆んど稀なるに観じて分明なるべし。然るに、通常の婦人に對して、幾多の道士賢者すら尚ほ遂ぐると能はざりし大悟を求めんとす、思はざるも亦甚しと言ふべし。

假りに敎育者を以て任ずる人に問はん、君は、其敎子と其の實子との間に相違を感ずるとなき乎と。若し實躰に此の疑問を考へ、反省して其の一視同仁の難き所以を覺るものあらば、即はち能く繼母なるものの地位の困難なるに同情を表するとを得べし。

左れど、此の同情を表するとの薄きも亦た世の常なり。既でに世の常なれば、之を責めたりとて怠に何の甲斐かあらんや。若かず之を世の常なりとして観ぜんには。夫れ、繼母すでに世より嚴密の批評をうけ、彼れいよいよ世評を氣にして、いよいよ不自然になり、もしくは反動して邪氣を起し、もしくは又た其子の上に敵をうつて之を酷遇するとなどあらんか。何れにせよ、此等の侍遇の結果をうけて、終身其の痕跡をのこすものは、即はち繼子なり。繼子、かゝる敎化の下に、ひねれたる人物となつて世に出づれば、世は亦た當然なる罰を施こすかの如き躰裁にて、之を悪み、之を罵しる。嗚呼、到る所ろに此の悲痛を生起せしむるの元因を何處に歸して、以て其の罪を誰に責めんとする乎。傍観者必らずしも唯一の悪因にあらず。繼母亦必らずしも其の悪因にあらず。况してや、其の繼子に於てをや。嗚呼それ誰をか恨みん、抑も天か、何んぞ天ならん。抑そも境遇か、境遇何の感覺あらん。蓋し知りがたき因縁によりて現在の所生斯の如し。左れば人々其の地位相應の心得を爲し、可成く悪果を滅ずるの覺悟をもて、愼しんで不幸の種の廣く播かるゝを防ぐの工夫を爲すべし。天下到る所ろ道ありとせば、亦到る處に救濟の方なしとせんや。

女性と朗讀

赤石猛

總ての人悉くは雄辨滔々鬼神をして泣かしむるが如き辨舌者たる能はざるも、訓練の法その宜きを得れば、如何なる人も相應の朗讀家たるを得るに至るべしとは是れ古人の說く所なり。今もし玆にこの辨舌と朗讀との二者を比較せんか、雄辨

は男性にして朗讀は女性たるものゝ如し。かの青春妙齢の處女が、その將にしたゝらんとするが如き唇を開き、眞珠の齒を顯はして、講壇に立ち、喃々辯じ去り辯じ來る所、愛らしといへば愛らしきには相違なかるべきも、所謂淑德を破るの譏なき能はず。さればとて、まさかに井戸端と爐邊とを唯一の講壇となし、徒に人後に廻りて、人の是非論評を試み他人の不平をこぼす、これ必ずしも婦人の能事に非るべし。女性亦時に公會の席上に顯はれ、大に論じ大に說くの機なかるべからず、斯る時にあたりて若し演說に代ふるに文章の朗讀を以てせば、淑德を破るとの譏をも免れ、しかも又よく聽くものをして大に動く所あるを得せしむべし。如何に名作の文章詩歌といへども之を讀むこと尙ほ電信の符號の如く、平々坦々たるものたらしめば、徒に人をして眠らしむるに過ぎず。故に豫め大に朗讀法を研究する所あり、抑揚斷續の呼吸を心得、機に臨み文に應じ之を應用するの素養なかるべからず。吾人は是に於て女學校なるものゝこの朗讀を奬勵すること尙ほ男子の學校にありて、其生徒に演說を奬勵するが如くなるを望まざるを得ず。素より之を一科として日課のうちに編入するは容易のことに非るべきを以て、當局者よろしく其間に立ち生徒をして朗讀會なるものを組織せしめ、以て一定時の會合をなし之が練習を計る亦可ならずや。

女子教育今日の趨勢

鷗村

女子教育の氣運は漸々、其頭を扛げ、趨勢、步一步を轉ずるごとにいよ〳〵强速に、稍や着實なる傾向を以て、隆々勃興しつゝあり。是れ蓋し現今時勢の然らしむる處なり。

戰後社會の要求が、國民教育の振作を來たし、國力の擴張が婦人內助の價値を識り、隨て女子教育の必要を感ずるに至りたるの時に當り、女子教育に熱心なりと稱せらるゝ西園寺侯の、文相の椅子を占むるあり。故に昨年以降、また〳〵女子教育せざるべからざるの聲、處々に聞ゆるもの、日を追ふて盛んに（本誌第四百十二號『近時の女子教育論』を參照せよ）其聲高きより出づれば、低きに反響し、輦下に出づるものは、廣く地方に波及せり。西園寺文相が『善良なる國民を養成せんには、必ず婦人內助の力を藉らざる可からず』と公言

したると、文部省の女子教育奬勵の方針を執るとの明白になりたるとの影響より、延いて去夏京都に於て開かれたりし帝國教育大會にての、女子教育振作論の歡迎となり、幾多の地方にての、高等女學校設置計畫となり、小學齡女兒就學督責の必要認識となれり。試みに今日までに、高等女學校設置の計畫をなしたる諸縣を擧ぐれば凡そ

愛知、宮城、奈良、茨城、鳥取、山形、福岡、群馬、北海道

等にして、其他なほ吾人の傳聞せざる地方にして、盛んに同樣の計畫をなすもの必ずや多からん。其中には既に設立開校の運びに至りたるもあり。加ふるに又東京及び地方にて新に數多の私立女學校の設置を見るあり、在來の女學校の規模を擴張するもありと聞く。又近時『官報』の逐次掲載しつゝある學事年報摘要に就き既に顯はれたる一府六縣の將來學事施設要件中、女子教育に關するものを擧ぐれば

○大分縣は高等女學校の設置に企圖せんとすといひ
○山形縣は女子の就學を奬勵するを最急務の一とすといひ
○島根縣は女子中等教育の途を開く事を最も緊要なるもの丶一に置き
○愛知縣は女兒の就學を督勵するを二急務の一に算し
○山口縣は女子の就學を奬勵する事を急なりとし
○福島縣は女子就學を督責する事を最急務の一とし
○大阪府は學齡兒童就學中特に女子をして就學せしむることを怠らざらしむる事を以て急務に屬するもの丶一となせり。

以上は啻に全國中の最小部分に過ぎずと雖も、餘の大多數の府縣の方針もまた必らずや多少同一轍に出づべきを知るに足る。去れば今や我國全地を通じて到る處、殆ど女子教育隆盛の好兆を呈せざるはなしと稱して可なり。吾人は天下の爲めに同人相慶賀して、其盛運を迎へんとす。

其趨勢の盛んなる既に今日に臻れり。されば世俗言論社會の女學をいふの聲、往々にして聞ゆるあり、今後は益々其多きを加へんとす。而して其言ふ所は概ね、前年盛時の女子教育を罪して、歐化主義の謬誤に陷りたるものとし、また國粹主義の弊害を厭ふを以て、執中是正の女子教育あらんことを希ふに外ならず。吾人素より彼等が議論に重きを置くものに非ず。然れども世論の女子教育をいふもの、頻々として繁からんは、斯道の興隆に大に裨補する處あるを以て、向後ますます其多きを増さんとを欲し、且つ既に現はれたるもの丶中に就きて左の二論を採録す。

『太陽』第五號教育欄内雜論中、「女子教育熱」と題するの條あり、左の如くいへり。

昨年文部大臣の更任ありし以來、復々女子教育熱は高くなりぬ、本年に至りては實際の上に於て、之が實行を見るに至らんとせり是盡し悦ぶべし、然れども女子教育は失敗の歴史を有せり、歐化主義の爲に誤られて、束髪熱となり、於囉婆となり、輕佻女子を造り、浮薄婦人を出しぬ、而して、之が反動として起りたりし、國粹主義の大打擊を破り、爰に忽然として冷却し去り、角を矯めて牛を殺すが如く、却て大に衰退に陷れり、夫の歐化主義に誤られたりし女子教育、素より不可なり、而かも、國粹主義の大打擊の餘波、之をして萎靡不振に陷らしめたりしは、亦決して遺憾なきにあらず、歐化主義の弊に陷らず、國粹主義の大打擊の餘波、之を萎靡せしめず、中正適當にして、天晴日本の婦人たるべき婦女を造る所以の教育を盛ならしむるは、與人の等しく希望する所、今後の女子教育は、必ずやこの途に出でざるべからず、今日女子教育の任に當るもの、又は之より之に當らんとするものは、乃ち深くこの點に注目せんことを要す、盡し其の歴史は正に之を教ふるに餘りあれば也、

『早稻田文學』第六號の雜界は亦た既往の女子教育を回想して、そが今日の狀態を叙するあり。明治十八九年頃より同廿二年に亘りて隆盛を極めたりし女子教育は、即ちまづ專らに形に新教育の結果を現さんと力めたりと評して之によりて、生ぜし弊害を擧ぐると、『太陽』記者よりも一層綿密に、彼所謂歐化主義女子教育の、我國家庭の舊主義と衝突せしかどを擧げ、其證言として、若松賤子が『主婦となりし女學生の經驗』を引用せり、又其弊害によりて生じたる大頓挫の餘波のなほ今日女學海の汀に打寄するものを叙していふと左の如し。

今日の有様を見るも、女學生あがりといへば兎角嫁に貰ふことを憚る氣味あり、隨ふて、父兄はた子女を女學校に入るゝことを好まぬ樣なり。都はしばらく措き、地方の父兄などは、今は都に遊學さすることを恐れ、小學卒業後は講義錄などにて獨習さする向多し。近頃女學の講義錄實行よく、また種類をましたるも是がためにあらぬか、女學の雜誌も昔ほどは婦人改良などの談理を爲ずして、寧ろ家庭のことに力を盡すげなり。家庭專門の雜誌などのやゝ行はるゝも、女子教育の漸く質實とならんとする一兆か、また學校にては女子職業學校など實用的のもの盛なるがごとし、又其他の女學校にて、從前の歐化主義は全く癈れて、保守的となり、復古的となり、活花茶湯などをはじめ、追々昔風の藝事を學科に加ふるに至りぬ。總躰よりは、女學は少しく穩當となれるげなると同時に、著しく活氣を失なへると評すべし。但し其形に形はるゝ結果は、歐化時代に較ぶれば、はるかに目やすくなれるとは事實なり。されど形の爲めに精神を殺すは、精神の爲に形を亂すと利害果して如何。此點女學家及び社會改良家の再工夫を要するものゝ如し。

往年の女子教育が歐化主義に流れたるは事實なり、歐化主義なほ可なり、其の形の上の變化を取り急ぎたるの誤りは、之を回顧して、今日慚汗背に徹するの人必ずや頗る多からん。然れども此歐化主義の誤謬は、豈に獨り女子教育をのみ責むべきものならんや。當年の社會夫れ自身が歐化主義に香觸れ、社會万般の事物を歐化せしめんとしたるものなり。之を教育の上にいふも、男子教育の歐化主義に傾きしと、豈に女子教育の然りしに劣らんや。況んや女子教育の如きは、社會凡ての活動に尤も後れて隨伴進步するものなるをや。若し今日の人のいふが如くに、當年の女子教育が、他に優れて、歐化主

義を執りしことなりしならんには、其勢力は頗る莫大なりしものたらざる可からず。然れども如何せん我日本の社會は、未だ曾て女子教育に許すに、善にもあれ惡にもあれ、さる奮飛的運動をなす丈けの勢力を有せしめしことあらざるを。勿論後日に至りて覺り見れば、歐化主義の弊害や、頗る痛むべきもののありしことなれども、其弊害といへども決して、彼『太陽』記者がいへる如くに、甚しきを極めず、多くは誣言のみ。今日賢しら顔して、往年の女子教育に於ける歐化主義弊害の非を鳴すものも十有八九必ずや當年には隨分人にまけぬ、歐化主義の人なりしならんに。若しいふが如くに、輕佻女生徒、浮薄女子、當年の女子教育より多く輩出せしとすれば、其罪は彼等の上に非ずして、無乃却て此等を産出したる教育者にあり。而も其時輕佻浮薄なる多くの僞女子教育者の起しものを、今日眞面目を裝ひて、非歐化主義を唱ふる者の中にもさる教育者の降參人あり。彼等は社會の風潮次第にはいつまた歐化主義を擔ぐに至るかもしられぬ實に洒々落々の人士なり。』

進歩は衝突を意味す。女子教育の大精神は素より二三世代の未前を見透したる所に定めざるべからずと雖も、素とこれ人性圓滿の發達たる以上、其時代に應ずるの教育なかるべからず。『早稲田文學』記者は、よし形に於て多少亂る處あらんも、精神活潑の女子教育あるを希ふに似たり。着眼一頭地を保守主義者流以上に抜くと雖も、元來時代風習の形ちと漫りに衝突を起すことなくして、精神に於て着々活氣あるの進歩をなすことを得るが、女性運動の本領たれば、よく之に適ふの教育を施すが、執中是正の女子教育とはいふべし。吾人は今後の女子教育が彼歐化主義を去り、また國粋主義を脱したる中正順理の主義によるものたらんことを欲してやまず。然れども教育は畢竟一の技術なり、假令ひよく哲理に曉り、主義を持するとも、眞正達道の教育者の身を以て之に任ずるに非ずんば、何ぞ其妙巧を收むるを得んや。ヤスナイア、ポリスに於ける、イブルザンに於ける、其教育主義は學者の目より見れば、哲理に違反すること多しとして非難を受くべきも、トルストイ及び、ペスタロッチは、之を運用して其妙を行ひたるにあらずや。今後の女子教育如何に理に於て法に於て、圓滿なることを得んも、よくこれを運用するの眞正教育者其の人有らずんば、千法万理皆な用なし。されば吾人が望むところは、熱誠達

道の女子教育家の起らんとあり。眞に渇望すべきものは、唯是れ。

於此乎、吾人は憂ふ、今後隆興し行くべき女子教育界に、當路者の方針と風潮の傾向とを阿り迎へて、一夜造りの女子教育者の叢出すると先年に於けるが如きあらんを、是れ實に憂ふべくして、之を防遏するに殆ど其策なし。所謂往年女子教育が失敗の歴史なるもの丶、多分は、彼等によりて作られたるものなるとを思へば、吾人が今後の女子教育に對して其執中是正ならざらんとを憂ふるよりも、無乃却て甚だ憂ひを爰に存する、亦故あるに非ずや。

結婚の眞意義

杜鵑子

天國には男女の區別あるとなしとは、圓滿なる人間は男女性の兩者を備へたるとの眞理をいふものなり。基督は人間圓滿の模型なり、形を男性に取りて生れたりと雖も、其品格は男女兩性の美を融合調和したるものなり。コレッヂ曰はずや、大人は男性たる丈けにまた女性なりと。人間は圓滿に近くに隨つて、益々男女品性の特質を脱しつゝあり。男女品性中の最美最麗なるものが、互に磨きつ、琢かれつ、相包合融化し人性に於て十分の發達をなしたる時に、人間は圓滿を致したるなり。而して人性發達の至極は神性にして神性のペルソナリチーに、男女性の特色あるとなし。

されば人性の發達には、男女兩品性交互の琢磨融合を要す。抑も男女の情交なるものは、この妙義あるが故に神聖に、結婚配偶の眞理は實に爰に在り。結婚なるもの豈に、啻に相互情人の愛念を滿足せしめ、生涯の同伴共働者を得せしめ、新家族を形成せしめ、次時代を起さしむるの意義をのみ有するものならんや。此等の意義素より高尚なり潔白なり。然れどもこは單に結婚の副意義たるに過ぎず。眞に靈性的の意義を以て解すれば、結婚は、人性圓滿の發達を目的とするものなり。結婚するもの自ら此意義を了解せるは極めて尠しと雖も、凡てを全うするの愛情は、斷えず天理の至妙を着々行ひつゝあり。今試みに情人間に就て見るに、一旦相愛の念を運ぶに於ては、理想の向ふ處、感情の發する處、類似するに至り、たゞに是のみならず、形の上に表はれたる事に於ても、情人間の

文字が、筆法筆勢敢て習はざるに、忽ち酷似し、殊に夫婦は容貌に於て相背たる點を生ずるとさへ説くものあり。形體上の表顯すら如斯しとすれば推して知るべし、心靈上の近似融合の度幾許なるべきかは。抑も夫婦一體なりとは、男女異性が融合一致するに至る終極眞理をいふなり。

結婚の眞意義は靈性的なり。されば結婚とは形式上の契約を經て、同一家族に入る時に於て、始めて存在するの事ならんや。男女心身を許して相愛するに至れば、兩者性格の麗質相異なるもの、互に融合を始む。即ち此時二人は一體となり始めたるなり。夫婦は靈性に於て始まり、また始まるべきを本義とす。されば彼の既に許嫁許娶を約したる情人は、全く靈の意味に於けるの夫婦たり。然るに世上不靈の男女、往々にして、一旦相愛したるの人を去り、彼に往き、此に就き、其甚しき者、酷評苦言を以ていへば季候の變ずる毎に、情人を變ふるが如きものあり。而して彼等は其度毎に、靈性の意義に於て夫婦となり、また離縁するものなるとを覺らず。形式の契約を經、家族的の關係を生ぜざる以前ならば、如斯くするとも敢て差支へなしと思へるが如し。彼等は靈性の意義を曉らず。形躰上の儀式は素より、社會の制裁下に在るの人間として、社會に對するの正義より、嚴重に執り行ふべきものたりと雖も、形式は單に形式なり、之を以て悉く靈性ある人間作事の是非を律すべきものならんや。而も其形式すら、之に幾分の靈性的意義の加はれるによりて、初めて吾人は之を守るべきものなるを知るに非ずや。されば尤も重んずべきは靈性の上にあり。若し夫れ心靈的の契約、之を破了するとに於て、不理ならずとせば、形式上の契約の如きは、之を破了するに於て、何等の不理かある。社會的制裁の配下にのみ、正義を守るが如きものは、到底靈性に於て活動するものに非ず。此輩何ぞ人性の發達を知らんや。彼等は蓋し人性の、靈性的生存競爭に於て失敗し、漸次消滅に就くの徒なりとす。

吾人は素より靈性の意義に於ても、形式の意義に於ても、再嫁再娶するとを許す。故は一旦心靈上に契約をなしたる男女が、相互麗質の融合同化し難く、故に人性の圓滿に近き難きを見て相分れ、去りて他に契約を結ぶに至るを許さゞる者に非ず。然れども此時彼等は曾て一度び、靈性の意義即ち眞正の意義に於て、人の夫たり、人の妻たりしとあるを記し、今他に適

は眞に再嫁再娶をなすものたるとを覺知せざるべからず。忘るゝ勿れ、心靈上の契約は、男女をして、眞の夫婦たらしむるものなるとを。

既に心靈上の契約あれば、男女は爰に夫婦となり、一躰となりたるものなるを以て、結婚の眞目的に入りたるものなり。されば彼等若し互に、事業の共働を希ひ、家族の形成を思ふの時には、社會上の正義を守りて、形式上の契約に入るべし。もし又これを欲せず、之を要せずば、心靈上にて結婚したる儘にして、豈に殊更に形式を行つて、家族の關係に入るとを須ゐんや。今の男女の相愛し相婚する、率ね將來家庭の幸福生涯の同伴てふ副意義を主とするとを知りて、眞意義に通ぜず。其靈性に達せざるもまた遠しと謂ひつべきかな。結婚は人生の一大事なり。而も是れ、人性の圓滿に近づかんとするに當りて、其行路の境遇を一大變し、異性の麗質相琢磨し融合するに入るものたるを以て、更に大事なりとす。其大事たるは、豈に何ぞ銀燭臺下、三九盃を擧け、祭壇龕下、誓約をいふと否とに關するものならんや。

勤儉と貯蓄

藤井淡海

（五）天龍河畔の一偉人

遠州長上郡和田と稱ふる一村落は、世に名高き東海道三大川の一なる、天龍川のほとりとぞ。此村落に、金原明善となん呼べる一翁あり。曾て本邦は山川多くして、未だ治水の道備はらざるを以て、年々歳々汎濫の爲め、家を失ひ、產を破り。殊に一度汎濫の災害を蒙ぶりたる田畑は、容易に回復すべからず。金原明善翁は、夙に祖先の遺志を繼ぎ、植林治水の事業に一生の力を擧て、又餘力なしと云ふ。吾人翁が偉業の芳名を聞くや久し、頃日靜岡縣出身にして、翁が居常を知れる二三の友人に就て、親しく翁が性行を聞き得たり、今翁が事業の概略を擧ぐれば、實に左の如し。

明治十年の頃、一家を擧げて治水の資金に充て以て、天龍川河身の改修に專心從事したる、金原明善翁は、河身改修の事業略ぼ其緒に就き。亞で內務省直轄の工事となりしかば、翁が事業は爰に其一端を貫徹するを得たるに依り。更に其水源たる、信州、遠州、參州の山林を培養し、一は治水の根基を

圍め、一は荒廢無價の山林をば、有價の山林ならしめんと志し、自ら信遠の諸山を跋渉せり。此間翁は腰に草履を付け、麥の煎粉、干飯などを以て、僅に飢を凌ぎたり、然るに翁は主として、遠州豐田郡山香村瀬尾官林の、天龍川治水に、最も直接の關係あるを認め、充分之が植林を行ひたる上。朝廷に獻納するの精神にて、其筋に稟請したるに、其筋に於ても翁の志を嘉せられて、委托の命下りしかば、翁は家財の殘額を以て、右山林改良の基本金に充て、明治十九年始めて造林事業に着手し、茲に翁は川より轉じて、山を治むることとなりたり。而して翁は十九年春、始めて杉檜苗八萬七千六百五十本を植付しより、以來昨年に至るまでに、植付たる樹數、及び造林費は左の如し。

植込本數杉　百七拾六万四千六百三十八本
同　檜　三拾五万九千三百〇七本
此造林費　四万三千二百十七圓九十七錢四厘

又明治廿一年近傍村落の共有にして、嘗て斧斤の入らざる深山。或は只天然の儘に放棄したる、荒廢の山地を購入し、昨春に至るまで植付たる樹數、及び造林費は左の如し。

植込本數杉　百七十三万九千百三十一本
同　檜　三十一万三千二百八十四本
此造林費　二万七千〇七十九圓五十五錢三厘

然るに現今立木賣買を、標準として假算すれば、今後十ヶ年間に栽植すべき、未植地に植込樹數を合せて、五六十年の後に至れば、實に一千万圓餘の金額に上るべし。而して此造林の爲め、年々汎濫の炎害を免るゝことを得ば、其間接の利益の幾許なる哉を知らず。嗚呼此偉業を繼承せしめたる、金原明善翁が父母の賢德は、決して沒すべからざるなり。

（六）今一勝負の聲は息みたり

蕩駘たる南風は、梅香の薫りて、鶯の囀づるを聞けば。春の至れるを知り、一度北風の枯葉を吹くときは、秋の至れるを知るなり。實に世の中の變遷、人事の定むべからざるも、人の道を修め、主義を貫き、將又事業を遂るに於ては、詮するに至誠の意義に異るなし。

叡山颪滋賀の小波そよぐ太湖を隔てゝ、相對するは衣笠山なり、里人は此山を俗に、觀音寺山と稱し、昔佐々木六角の居城にありたり。此山敢て高きにあらさるも、東は箕作建部山、

西は琵琶の湖を圍らし、南は明智が舊城蹟なる老蘇山あり。北は和田が舊城廓なる和田山ありて、風景絶美なり。此衣笠山の麓にて、程遠からぬ、位田と稱ふる一豪村ありき。昔此村に强盜入れる時、四方より夜守の犬の聚ひ來りて、吠え猛りければ、小判を礫てに打付けたりと。又他國の人此村に入れば黄金の響きすと唱ふ、如何に此村の富豪なるか、推して識るべし。

近江國位田村、松居某なるは、十數代連綿として、持丸長者と唱えらる。其祖先は卑賤なる、編笠の行商にてありけるが、其性誠實にして、慈悲深く、寛文の其昔、編笠數多を荷ひて、播州路へ旅立し、途次守山の驛端を過ぎぬる折は、早や殘月は落て拂曉の頃なりし。時に晩秋霜枯の眺とて、紅葉は旭に映じ、翩々たる落葉は、錦を連ねたるに異ならず。松居某は並木の芝生に腰打掛けて、暫し息ひしが、偶と足元を顧みるに、皮財布の落しありたれば、驚きて拾ひ上げ、眉を顰めて、嘸や其落し主の尋ねありけん、便りなきことをせしもの哉と呟ちつゝ、紐とき檢むれば、内には大形小判數多ありしより、元の如く紐引締めて、天秤棒の先に結び付け、其落し主を探

し求めしに、播州赤穂神宮寺の、沙門俊惠なるもの其落し主なりと知り、松居某は其拾物を、其主に返戻せしに、俊惠謝意とて出したるものは、決して受領せざりき。此事播州の得意先に聞え、其正直なるを以て、倍々商賣は繁昌せり。是れ松居某が、持丸長者の起元なりとす。又或時松居が家の天井より、滴り落つるものありければ、怪しみて下男を呼び、二階を檢めしめたるに、昨夜明け方盜賊の入り、出場を失ひ、二階の押入れに潜み、時を遷したるが、三伏の暑さに耐へ兼ね、鈍くも識らず熟睡してありつるが、尿の詰りて、詮方なく洩したるとの白狀せしかば、下男は太き盜賊の仕業かなどて、棍棒を執て打たんとせし時、主人は慌しく押止めて、云へるには、盜人も嘸や空腹にありつらん、早く茶漬にても與へよと命じぬ。後ちに松居は、靜かに盜賊に向ひて、斯る惡業を働きしは、定めて譯のあるべしとて、懇々改心を說き聞かせ、若干の金子を與へ、之を以て資本となし、相應の商賣をなし、勵みて怠るべからずと諭しぬ。

善を以て惡に克つとは。松居某が如き人の、實踐を云ふべき乎。夫れ一藝の極に達し。一業を成就したる者は、洵に尋常

に異なれるものあり。近世商人の輕薄なる、最も甚しきものあり、素より業躰の何たるを問はず、其貴卑は單に其人の誠實、或は心事の如何にありて、決して其事業の卑しむべきものなし。斯て松居某は今も尙榮え、代々慈善家出でたり。曾て先代の主人は、毎年大晦日には、近村の窮民に、白米一俵づゝを施與せり。近村の某なる窮民に無賴の徒ありて、博奕を成せし時恰も、白米一俵下男に負はせて贈り屆く。此時彼の無賴漢は、位田村の松居より、米が屆きたれば、之を以て今一勝負との聲戸外に漏る。松居が下男は沸然として返り、其始終を主人に告ぐ。松居は之を聞きて大に憐れみて、再び下男に、白米一俵を負はしめ、先刻贈り屆けたるものにては、此年を越ゆる事須遑なれば、今一俵を贈るべしと傳へしむ。此時彼の無賴漢等は、心中刀を以て突るゝ如く、非常に感激し、夫より全く非行を後悔して、其後は家業を勉勵し、一家擧りて隆盛に赴き、其家今に榮え、其村に今一勝負の聲は息みたり。嗚呼斯る善行は、一席の說敎に優るものと信ず。

觀潮

觀潮庵

(十七) 變俗の一二 (社會心理的問題)

我が國俗として、喜怒哀樂の色に形はれざるを可とし、寡默を以て上品と見做すの風習あり、曾て口舌(おしやべり)の一條は離緣の口實となされたり。今後此風習は如何に成行くや、其の傾向は那邊に在るや、是れ社會心理的問題の一種として、究むべきものなり。

余を以て之を見るに、概して喜怒哀樂を色に形はし、正直に發表するの傾向あるか如し、是れ生存競爭上、自然の勢に驅らるゝが爲めなり、而かも之を發表する傾向に伴うて外美內醜の僞善も亦た發達するの傾向なきにはあらず。要するに社會組織の變遷し來れるが爲めに、斯かる風習にも變化を及ぼしたるなり。

例へば新聞創刊の廣告、會社乃至一私店の開業式、其他一般

の開業、懇親會等の摸樣を知るものは、廣告する仕方、開業の盛大を示すの術は稍巧妙となり、一俗習をなして終に斯の如く摸倣するに非れば、勝利を得ると難きのみならず、其の會社、其の商店の盛大ならざるが如く、思はしむるものなきに非ず。蓋し是れ都會の出來事にして、都會にては此種の事を爲して信用を買ふなり。又た撰擧競爭の如き新組織出て來れば、必すや、競爭場裡に立たざれば落撰するの恐れあるを以て、閉戸先生を氣取るとは失敗の本なり。されば必ず自重し若くは山師的に競爭せざるを得ざるなり。又た文壇に於ても深く攻究して大器晩成を期するものは、十分の用意ありて後ち發表せんとを欲するも、或は虛名を博し、或は生活上の爲め、可成新奇を競ひ、速成を尊びて、今日學び得たる所、之を明日に發表する如き狀況を呈し來れり、唯だ是れ早急を尊ぶの風なり、何事にも謙遜して、所得せるものを練熟せしめ後ち徐々として世に立たんとするものは、稀有となれり。されば平凡の多數人は、雷同附和するの性を有するが故、社會は漸次、從來の寡默、喜怒色に形はれざる如き風采をして反對的に變更せしめ、斯に同化せしむるに至るべし、唯だ注意すべきは、此傾向をして天眞爛熳の眞情に出でしむるの必要あると是れなり。現に排斥せられつゝある厚葬の如き、徒らに賑はしく虛禮を粧はされば、外聞如何と氣遣ふて漸次其の風を盛ならしむるは、悅ぶへきとにあらず。終には支那風に、葬禮の際には、泣男泣女を雇入れて以て、悲哀の情を飾らざるを得ざるに至らん。

大凡民族は種々の變更を來すものなり、而かも其の變更する次第を察して、改善するとは必要なり、寡默の風の一般に可とせらるゝの際には、性來寡默ならさるものも、之に化せらるゝを常とす。此には僞善的寡默の習俗を造る弊あり、何事も廣長舌する風の盛んなる時は、僞善的廣長舌の習俗を爲すの弊あり。されば此僞善的風俗の傾向をして、天眞的に變せしめざるべからず、但し此種の風習は多くは利害の點より變更するを常とするものなれば、利害を捨てゝ好風習を造るとは容易の業に非るなり、如何に天眞の性なりとて、所と時と位とに制裁せられて、止むを得ずに或は寡默し、或は廣長舌するとあらん、嗟民族の改善も亦た難いかな。

（十八）浄瑠璃樂に就て

都會と地方とを問はず、寄席若くは他の席上に於て語る所の、かの浄瑠璃、即ち義太夫の樂なるものは、今後如何に成行くや。文學者の見識は余の寡聞なる未だ之を知らず。左に觀潮記者として、一二の所感を記さん。

昨今東京の寄席に於ては落語より、義太夫の興行は盛なり。其の盛なる理由は何處に存在するにや。演劇にても世話物よりは時代物を尚ぶの風あり、幾度か演ぜられ、幾度か之を語らるゝとも、更らに倦くとを知らざるが如き樣は、現今の盛にして永續すべしとは思はれず。而かも新作物の好評なく、之を義太夫として語り、之を劇として演ずるも面白からぬ所以は如何に。想ふに文學界に立つ人士には、一定の見あるならん。

愚見に依れば、（一）義太夫本に用ゐられたる言葉が、三味線なる一種の樂に適すると、其の一なり。用語は大坂言葉にして普通人民一般の標準語にはあらず、一寸了解し難き言葉もありと雖も、之に節譜を附し、段落を造る時は、妙に樂と符合するものから、一種言ふべからざる味を有す、從て語る言葉其ものが音樂の如く、快感を與ふるなり。（二）事柄の戯曲的なると、而かも稀有の好材料を取りしと、其の二なり。正史に對照せば誤謬の事多く、事實にあらざるもの比々、皆然り。然れども假令夢幻劇なりとは言へ、稀有の好材料、當時代の粹を拔き、之を戯曲的に組成したるが爲め、事實の如何は且らく思考を廻らすの餘地を與へず、蓋し戯曲は必ずしも事實正確なるを要するにはあらず。史劇に於ては之を要すとするも、事實其儘にては戯曲的ならざるもの多きを以て、戯曲としては是非虚飾も必要のとあるなり。一代風習の粹、稀有の好材料、其物が已に生命あるものなれば、之を作し之を演ぜらるゝ時は、必ず其間に不可動の人情に合するものあるを以て、別に珍奇の思考も起らずして喜怒哀樂するなり。されば拔粹と材料とは肝要のとなり。（三）風俗習慣好尙の過渡の時機なれば、古代の面影を慕ひ之を名殘とする如き心地あること、其三ならん。現時の事實を現場に見るは寫眞と同じく餘りに明々地に發表せられ、實情を動かすと或は過度に、或は皆無にして、想像の働らきを沒却せしむ。從來の義太夫は德

川時代の事柄に屬するもの多く、當代の風習、好尚、道德若しくは嗜好の粹に適合するものあり。されば現今の如く殆んど社會の組織を變じ、好尚嗜好共に變化し、又變化しつゝあるの際は、即ち過渡の時機なれば保守的精神も加はり、懷古の情も混入し、想像も一層深く恰も昔のパノラマを見るが如き心地するなり。現時代の事柄は充分に記憶し、又は實驗するか爲めに猶ほ寫眞を見るか如く、昔代の事柄は繪畫の如く想像を起し、懷古の情を催さしめ、名殘惜しき情を呼び起すなり。蓋し其作物も勝れたるものあるは明かなり。而も非凡の傑作に非る限りは、餘りに古代のものは、到底快感を與ふること能はず。是れ想像も及び難く、好尚も餘りに懸隔し居るか爲めなり。されば時間よりするも德川盛代の如き、若くは源平時代の如き恰好のものたるなり。

以上は二三の所懷に外ならず、要するに以上の如きは第二原因ならん、能く人情に合し一代の粹を拔き加之優美なる言葉を用ゐ更に用語の當代の樂と符合せば、必ずや不朽の傑作として永續すべきなり、一言以て之を掩へば「美」的なるものは快感を與ふるが故に、其作「美」なれば不朽のものとなるは明かなり。夫れ然り然れども、第二原因たる、用語即ち言葉の如き、材料の如き、時代精神の過渡の時機なる如き副因なるもの丶變遷も亦注意すべきものなり。想ふに今後百數年を經過せば、明治時代の東京言葉にて、日清戰爭を語り之を演劇するの時は、必ずや吾人が昨今、德川時代のものを好んで飽かさる如き事あるべし。

現今種々の戯曲を作するものあり。其の中、史劇に屬するものは、重もに織田以後德川時代に材を取り、言葉も多少時代風を用ゐるものあり。悲喜混合の劇なる世話物には、當代を寫したるものも不尠、而かも德川時代に屬するもの多し。而して現今作者の戯曲は、必ずしも劇に演するを目的とせず、文學上單に讀詩として作るもの多し。其の樂に適ひ、言葉に節譜を附してリズム如何にも面白く、殆んと音樂的に抑揚高下し得るの一事には注目するものなし。特り作するもの丶戯曲的にして讀過の際快感を覺ふるもの、即ち「美」的なりせば、他は屬性として懸念するのみ。こは素より可なりと雖も、此傾向は淨瑠璃樂をして、衰頽せしむる最大原因たるなり。

近松が璃瑠理を作するや、素と人形をして演せしむるを目的

としたるものなれば、言葉の節譜と人形の擧動と音樂との三者をして調和せしめんとを期したり、他の作者も亦た斯く爲したり、されば今日の演劇も操人形同樣に節譜擧動音樂を適合せしむるとあるなり。然れども斯かる苦心は勞して功なきもの多く、從て之を倣ひて作するもの尠なく、終に淨瑠璃は一種の遺物として或る社會に名殘を惜まれつゝ、衰頽するならん。而かも之を劇場にて所作事に用ゐるの一事と、單に寄席等に於て之を語るの一事は、且らくは人氣を引きて生命を保つとを得んなり。

昨今盛なる義太夫節をもて、明治時代の出來事を作し、之を後世に遺し、單に淨瑠璃樂として語らしむるの一事は、決して不必要のとにはあらざるべし。今日の文學者にして之に懸念するものあるや否や。

斯に又た淨瑠璃樂をして衰頽せしむる近因あり、即ち都會と地方とに論なく、女義太夫なるもの流行する一事是れなり。女義太夫の流行したる原因は、且らく略す、其流行を盛ならしめたる所以は、婦人に一種のチァームありて客足を惹き、大入を爲さしむるが故、是れ席主の經濟上より來れると、來客の好尙變化より來れるとの二あり。婦人は所謂「さはり」を語るの際に稍適するのみにして、他は音聲、語勢の不足あるを以て聞くに堪へず。大概三味の樂を以て其の不足を補充するものなりされば昨今は節譜、段落も稍亂雜に成り來れり。多數の人は之を等閑に附し、語るとの巧拙には深く頓着するとなくして、單に音聲を飾り、チヤームの存する所に走るなり、而して斯の如きもの流行するは、此樂に改良の意見を有し、又は復古の熱心なきを證す。現今の流行は決して將來の盛大を證するものにはあらざるなり。然れば一方には作者絕無となり、他方には聞くに堪へざる女義太夫なるもの流行して、實體を汚かし、多數は此汚されたる語方を甘んず、衰頽せざらんと欲するも豈に得べけんや。夫れ淨瑠璃樂の事たる邦人の娛樂の要素として重大の關係あるもの、特り文學者のみ之に懸念すべき事にあらず、社會學者も亦民俗研究上より其の變動に着目するを要す。



評論

芭蕉が遁世（下）

知十

世若し累なくば、焉ぞ遁るゝを要せんや、遁れて身を處するの境なくば、焉ぞ亦遁るゝを敢てせんや。遁世者は必らず此岸に煩累あり、彼岸に安甜あり。之を脱し彼に入らんとするものなるべし。志慮なく家を出る者は風狂者のみ。俳人の風狂は風癲にあらず、殊に已れの見たる芭蕉は其角に非ず、惟然に非ず、頗る常識に富みし人物なりと認むるをや。焉ぞ風狂の餘に飄々然として、家を棄て月に嘯くものならんや。必らず世煩と塵累のまづ堪へがたきものありし者なるべき也。

伊賀の故里には松尾芭蕉が遺族今尙在り。友人晉雪入君は曾て此地に遊び、遺族遺跡を訪ひ、得しところ多し。其遺族の雪入君に談じたるところの口碑に因れば、藤堂良忠（蟬吟）の死去するや、其嫡子良長年甫て一歳なりき。之をもて其相續を定むるにつき、可となす者あり不可となす者あり、議論兩派に分れたり。芭蕉素より蟬吟の恩寵を蒙れる者、幼子を奉ぜんとして頗るつとむるところありき。而して遂に其志を達するに至れり。然れども之がため反對派の忌むところとなり、其爭鬪の間擠陷中傷至らざるなく、就中蟬吟の未亡人と醜聲ありとの說を傳ふるに至りきと。

良長成人の后亦た俳諧を喜び、探丸と號せり、芭蕉遁世の后久しくして伊賀に歸るや、探丸之を別墅に招き謁を賜へり、乃ち

探丸子のきみ墅野にて花見催ふさせ給ひけるにまかりて古き事など思ひいで侍りしに、

さまざまの事思ひ出す櫻かな　芭蕉

の句あり探丸之に脇して、

春の月はやく筆にくれゆく　探丸

はやく筆にくれゆくとは芭蕉の當時世をすてたりしを暗に惜みし意を含めり。良長が相續につきての口碑の傳ふるところ、一說として聞くべきものなりと思ふ也。

風雅をもつて理想となす者として見れば、御家騷動の張本人

めきし身となり、未亡人と醜聲ありなどうたはるゝに於ては、隨分其煩累に堪へ得ざりしなるべし。勝伯の目には芭蕉を經綸の大なる者と見たり。而して伯は評して曰く「芭蕉もアヽして居たらたかゞ藤堂の一家老くらゐなりしが、天下に志ありしゆゑにアヽえらい物となつた」と野心大なる者として見ても一小諸侯の俗事に齷齪して群小の怨府となるは面白からざりしなるべし。故にいづれより見ても、兎角に此煩累に堪へかね、自己が志ざしたる良長の家を襲ふの事成就せしがゆゑに、此を期として勇退せしは頗る機宜に協へるの處置なりしと思はるゝ也。

未亡人と醜聲ありきとの說は、素より此間に揑造されし中傷の言なるべし。然れども猶一說によれば、侍女と狎服したりとの說ありともいふ。芭蕉が女性との關係は此外別に聞くところなし、全く事實の存せざりし歟、將た事實存して傳はらざりし歟。芭蕉が行脚の掟(疑はしといふ者あれど)に猥りに女性の俳人に接すべからざるを戒めたり。遁世後の芭蕉は全く不犯戒を守りしたりし者の如し。芭蕉が遁世前の家庭及び品行の如何なりしは、聞くところすくなきを以て、素より論ずべき考證なしと雖ども、遁世後の芭蕉が斯く色戒を守りしは、其年少の失敗に顧みるところありて然りし乎(侍女との關係ありしといへる如き口碑)。將た此等の口碑は全く未亡夫人との關係の如く、中傷の臆說なりし乎。兎に角芭蕉が遁世には形にせよ影にせよ、女人につきての煩累が加はりありしなるべしと推斷せは、芭蕉が聖德はこれに因りて汚さるべき乎。

人の遁世を促す者は、女人との關係の由來多かるは聞くところなり。「浮世の果は皆な小町なり」との孕み句を懷ける俳人は此間の消息には無關係なりしなるべき乎。これもわが芭蕉の遁世の一理に加算せんと欲して、未だ其確たる考證を獲ざるところなり。

われをして假りに狂せしめよ、假りに妻孥を棄てしめよ、假りに家を出でしめよ、假りに自殺せしめよ、友人間に於るの評論は果して如何なるべき乎。われを俳星のうちに數へて少しくわれの末後の面目に光を與へしめくれんとする同臭味の徒は、曰く風狂の狂の募りしものなり。曰く厭世の厭の長じゝものなりと。われに金を借しくれし者は曰く金に窮せるの

餘なり錢に若めるの餘なりと。或は曰く慣懲、或は曰く失戀蓋棺の後評定百出、其歸着するところ如何を知らざるべし。これわれ現に近年に於て聞知するところ、現代の友人に於る評論にしてしかり、二百年前の古人をもとめて之を論ぜんとする、其の斯の如くなる怪むに足らざるべき乎。

上下數節記して玆に至りて、疑問は獨疑問なり曰く、

　芭蕉が遁世の理由は如何。

一日之を談じて社友秀野君と芘々君とに問ふ、談論數時にして、三箇が辯難せし結果は亦たこれ、

　芭蕉が遁世の理由如何

といふに止まれりき。疑問はどこまでも疑問として存しぬ。この疑問何れの日にか融けなん。

内田不知菴君芭蕉を敘せんとして考究已に三年に及ぶと。君が芭蕉傳出るの日、只だこの疑問の疑問として存せざるべきを期するのみ。

敎　育

戰後の敎育界

戰爭のありし後に、國民敎育の盛大を來たすとは、東西古今歷史上の事實なり。普魯西亞國の一旦ナポレオンに蹂躪されしや、盛に國民敎育を奬勵したる、佛國がセダンの敗北に懲りて、普通敎育を國内に振作するに至りたる、此等は敗戰の災厄を蒙ぶりて、大に警醒する所ありたるによれるものなるも、亦國民が勝戰の榮を荷ふものと感ずるの時にも、敎育は一段の進歩をなすものたるの事、實例遠きに非ず、我國戰後の敎育界に在り。夫れ戰爭は國力を驗するの大試金石なり。其成績の良否とともに、以後の國民は、國力の增大を致さんと欲するにつれて、敎育殊に普通敎育は大に活氣を生じて、其隆運を見るに至る。

國民の敎育の盛んなると否とは、其國力の消長に關するとは、千古動かすべからざるの眞理なりと雖も、普通人民は到底道

理によりて動くものに非ず。事實に觸れ、實用に逼られて、始めて道理の幾分を曉る。故に日清戰爭の如き大なる事實は、大なる實用を逼りて、普通國民は維新以來今日に於て稍く、眞に教育の實用を感ずるに至りたるが如し。其好證として、近日の『時事新報』が『戰爭前後の教育界』と題して某氏調査の概畧を掲載するものを見るに、目下の教育界は、甚だ好景氣にして、誘掖示導若し其宜しきを得なば、今後の發達異常なるものあらんといひつゝ左の如く記せり。

日清戰爭前の教育界　戰爭以前に於ても政府が多年普通教育に力を盡したる結果として就學生徒は增加したれども父兄が其子弟を就學せしむるに眞實學問の必要なることを承知して如何なる儉約を爲しても子供には學問せしめざるべからずとの意志より生じたるもの猶は少なく町村役塲の吏員より督促を受けて止むを得ず就學せしむるものと近所の何某も學校へ行けば我家の子供も打棄て置くべからずとの考へにて學校へ遣るもの其數隨分澤山なりしが

戰爭中の教育界　は甞て町村役塲の吏員より督促を受けて餘儀なく就學したる其子供が新聞又は錦繪などに日清戰爭の有樣を寫したるを見てさも嬉しさうに繪解を爲すを聞き無學の父兄にも學問の直打を感ぜしめたること少なからず學校より子供が歸れば戰爭の模樣分りしと云ふ一事は片田舍の教育に著るしき影響を與へ子供をして亦進んで學校に行くことを樂ましめたれば明に學校は戰爭以前よりも戰爭中が盛んなりき

戰爭後の教育界　は前に述べたる影響より子供に學問せしむるの必要は人の勸誘を待たずして知りたれば就學生著しく增加せり戰爭中、學校に行く子供の居る家にては戰地より來りし手紙を負ふた子に教へられて淺瀨を渉る譬の如く無筆文盲の親が子供に讀んで貰ひ始めて伜の無事のみか奮戰勇鬪の樣を知ることあり或は左樣なる子供のなき爲め折角來りし手紙を讀んで貰ふには態々へ願まずては叶はぬ故に息子の戰死も知らで時を經し抔の實事は各地方にありて其便不便の感覺は一般に發動し來りしが其便を感じたるものは勿論、不便を感じたるものも共にいよいよ教育の必要を感じたるが如しと云ふ

如此く普通人民の上には、實用となりて、教育の必要を感ずると、さもあるべきの事にして、識者は眞理によりて動くと雖も、凡人は常に實用に非ずんば動かざるを天下の通理なりとす。然るに又國力の增進は事實によりて來り、道理によりて來らず、されば彼の極めて單純なる實用よりしても、普通教育の國內に進歩發達せんとは、國力增進上の大事實なり。」普通人民が國民教育に對するの擧措は、眞に『時事新報』の記載せるが如くなるべし。而してまた教育社會が戰後の活動は著しく見るべきものありて、各府縣の教育會は、いづれも戰後教育策の研究に熱心に、中には知事よりして戰後教育上注意すべき事項を訓令するもあり。今其一例として鳥取縣教育會の議定戰後教育策なるものを見るに左の如し。

◎今後の教育策

一大に普通教育を擴張する事

一償金の一部を割きて小學校基本金とし授業料を全廢する事

全國に不學無智の徒なからしめ外國との競爭塲裡に立たんとするには教育の普及を計らざるべからず而して現今民間の有樣は教育の必要を識らざるにあ

らされども其實に乏しきより自然設備の完全を慮り普及の實擧らず國家は此際償金の一部を割き小學校基本金とし授業料を全廢し人民をして一大助勢を得て大に奮起せしむるの計畫なかるべからず

二制裁を設けて就學を督責すること

國家は助勢を與へて學校設備の完全を計ると同時に制裁を設けて强迫的に就學を督責し人民をして義務教育の實を擧けしめざるべからず

三視學を置く事

各府縣に專任視學を置き山村僻落に至るまで常に活氣を帶び教育事業の上進を企劃せしむる樣視學監督するにあり

四教員を養成する事

現在の有樣を觀れば教員數の不足せるより假に教師たるの技能に乏しきものを以て之を補充し重大なる國民教育を委せんとす寒心せざるを得んや宜しく一方には漸次師範學校生徒の入學程度を高め優等なる卒業生を出すことを計り一方には講習科を設け未熟の教師を上進せしむることを計らざるべからず

五教員の待遇を厚くする事

其教師を得て教育の進歩發達を望まんとせば必ず其待遇を厚くし此職を望み此職に安んずるの覺悟あらしめざるべからず而て其待遇の法種々ありと雖も第一着に俸給を地方税支辨とし之れに國庫補助を與へて其額を高むるを以て急務とす

六學齡を七歳とすること

義務年限を七歳より十一歳までとなさば現在の制度と年數は同じきも其結果の今と著しく異なるは論を待たず特に將來强壯有爲の國民を養成する上に於て幼弱なる心身を害するの虞なからん

二體育を奬勵し尚武心を養成すること

一學校醫を設くること

各府縣に學校醫一名を置き毎年巡視せしめ所謂學校病に罹るものなき樣豫防し又は治療の道を講ずる事

二毎月一回以上遠足運動をなさしむる事

山野海邊等に學年に應じ半里以上三里以下の遠足運動をなさしめ身體の鍛錬をなさしむる事

三女子の服裝を綿服筒袖となす事

女子も在學中は男子と同じく綿服筒袖とし儀式の際にも綺羅を飾るを禁じ常に勤儉の心を存せしめ兼て動作を活潑ならしめ以て體育を計るに在り

四修身讀本の編纂に注意する事

尋常科の修身書には愛國の志氣を發揮せしむべき地理歷史の談話を多く挿入するに在り

五尋常小學校に萬國地圖を揭ぐること

雨天の日の休憩時間に簡易なる談話をなし漸次萬國の有樣の一班を知らしむること

六軍人の像を講堂控處に揭ぐる事

三實業思想を發達せしむる事

義務年限を終りて高等小學に入るものに向つては學科によりて實業思想を輸入し生產的の人物を養成せざるべからず而して斯くなすには現に制定されたる實業補習學校を增設し漁業工商業等其地方に適したる實業の知識を授くるにあり

四中等教育を改善する事

一小學校と教育法の聯絡を保つ爲に下級には優良なる小學校教師を用ゐ上級には學識に富み教授訓練の理法に通じたる教育者を用ゐ特に德性の涵養に注意する事

二各府縣尋常中學校には必ず第四學年より實科を設け進んで高等教育を修むるものと中等教育を受けて終るものとの別を立て卒業後着實なる實業者たらしめざるべからず

五公共心を養成する事

條約改正せられ外人雜居するの日に於て彼我の交際を圓滑にし相互の平和を維持せんには從來の如き偏局の思想は斷然一掃せざるべからずされば修身讀書等に於て公共心を養成するの機會を怠るべからず

他府縣教育會の意見、或は府縣知事の訓示といふものも、既

に出でたるは素よりの事、未だ吾人の聞き及ばざる處のものも、其細項には素より多少の差異あるべきも、本旨の歸する處はみな以上に掲げたるものと相同じくして、即ち忠君愛國の精神の暢興、一般教育の奬勵、尙武心、公共心及び勤儉の習慣の養成、海事及び實業思想の發達等の外を出でざるべし。教育の本旨素より戰前戰後を區別せず、されど今日社會の要求に應ずるの策を講ずる頗る可。此時偏に希ふ、之を運用妙施する眞の教育者あれよ。彼なくんば利巧の万則千律何の益かある。

なほ戰後教育社會の現象としては、第九帝國議會に提出せられたる、數多の教育に關する法案及び建議案を始めとし、臺灣教育問題、尋常中學の增設、女子教育の好況等ありて、近來希れなる活動をなし、今後いよ／＼多望なりといふべし。

○○○熊本縣は女子教育の普及を圖る事及び女教員を養成するとを
○○○兵庫縣は女子教育の普及を圖る事を將來學事施設方案中に掲けり

雜録

墓所のまぼろし

青柳有美

墓所としいへば、ひたすらに寂しきもの、悲しきものとのみ思ひこみ、その影を望むばかりにも、尙ほ且つ身の毛寄だつ如きが常なれど、我れは寧ろ之を以て、平安の横たはる所、慰めの潜む場所とや言はん。我が心もし憂ひ、我が心若し痛めば、我れ走りて其ほとりに至り靜思一番す。忽ちにして平安の神何處よりか來りて戶の外を叩くが如きものあるを覺ゆ。時に我が意の駒狂うて騷ぎたち、炎々たる焰を吐き憤慨の情切りに起りて、胸中悉く一面の火ならんとするが如きことなきに非ず、その時我れ若し水をもとめんとして其所此所に彷徨ひありき、偶々將に朽ちはてなんとする寂しげなる一基の墓標のあるあるに遇ひ、花一枝を折りて之に手向け、朝の露と消え果てつる無名の佳人を吊はんか、をかしくも謝慰師

我が眼の前に現はれ出で、手綱を制して我れをなだむるなり。友もし我れを疎んぜんと欲せば疎んぜよ、骨肉我を棄てなんと思はゞ棄てよ、我れに訪ふべきの墓碑此處彼處にあり。之れ永遠の友にして我が安き住家、我が最後の隱家なり。

今宵もはや十二時を過ぎつれど、晝間のことの何となく氣にかゝりて胸穩ならず。不快の情忍ばんと欲すれども忍ぶと能はず、抑へなんとつとむれども抑ゆべきにあねば、まゝよ！一夜をかの菩提山の頂なる側の墓側に過ごさばや、さらば假令我れ今夜一睡の夢を結ばずとも、うちなる心の少しは靜かに息むの折を得ることもありなんと、遠吠ゆる犬も何のその、光といふものはたゞ星斗のもの凄く中天に滿てるの外なきに常になく怖氣も出さで、身ははや家を出でゝ、半里餘も距りたる山頂にあり。さては祈るともなく寢るともなく、そのあたりなる石に腰うちかけ、眼を瞑して頭を垂るれば、不思議やな！我れ我れを離れ、我れ我れを忘れ、我が身は我がものにして我が身に非ざるが如く、所謂夢現の境に去れり。時しも何處よりか現はれ來りけん、骨と皮とに瘦せ衰へ、血色あせて眞靑なれどなほ何處にか『美』の影をやどせる一人の佳人、身には灰色の衣を纏へるが悄然として我が前に立つ。その右手は如何なる故にか血に染みて、（淋漓たりといふにはあらねど）、なほ腥き臭を放ち居れり。かくあるもげに理りなれや、その掌には、幾條ともなく劍の痕をとゞめたる心臟の今は搏動絕て冷かなるを志かと握り居れば、我れ先づ仰いでその一種異樣の白光閃たる眼眸に接し、次ぎにその手にせるブロークン、ハートに眼を注ぎ、話すともなく口を開けば、

『そも御身は何物ぞ』その言葉は忽ちにして響き渡りたり。かの石膏の立像にさも似たる寂しげなる佳人、果してこの聲に應じてよく談ずるか、將又アスタルテの如く二三の言辭を殘すのみにして去るか、床しさ限りなし。幸にして彼れはアスタルテの如く志かく沈默を愛するものならざりき。その唇は恰もヴァルカンの工場にたてるパンドラの像の、ヂヨーブの息氣を吹き込まれつる時の如く、見る／＼うちに、瞬一瞬、秒一秒と、綻び始め、遂に難有や下の如き句を耳にするを得たることうれしけれ。

『世は情知らずの多き所とは預ねて知りつれど、此くまでに酷きものとは夢覺らざりき。世は盲の多き所とは聞きつれど、斯くまでに見知られぬものとは露思はざりき。人は我が苦心

の如何なるかをえさとらで………』となほ語をつゞけ居たらん如くなりしも、無殘や小夜嵐吹きすさび來りて、梢をならし、餘にも高からぬ佳人の聲を運び去り、聞く耳よくすませど、聞えざりけり。然れど松籟再びをさまりて次の言葉の響き始めて凄まじさ層一層。

『………あゝ！この心の餓ゑ！………世の人は、この段の消息を察する能はで、我れを笑ひ罵り、恩顔鶴髮の母上さへ我れをはしたなしと怒らせ給ふ。是の時に當りて世は悉く我れの敵にして、人は我れを鞭たんとして造られたるの觀なき能はず。あゝ！「生」！これ我れに向つて何の益かある?! 何の樂かある?! 咒咀！咒咀！社會なるもの其れ何ぞ?! 赤鬼青鬼の擾々として鐵杆を揮ふ苛責地獄に外ならざるなり。あゝ！脱れなん〳〵と幾度かナイフを研ぎ、幾度か繩を取りて天井につるし見んと思ひけることありしが、「死」はなほ油繪の如く、之を遙にながめ、之を脳裡に畫けば、頗る光彩陸離の觀あり、樂しげなる光を發ちて現はるゝと雖ども、之に近づきヴエールを拂つて「死」の面に接すれば、意外にも恐ろしげなるものにて、意を決してその淵に飛び入ること仲々に容易のわざに非ず。爰に於て我れ——あゝ！このいくぢなき我れ……この死にきれぬ我れ……この我れは世を離れて庵寺に籠り以て餘生を送らんとせり。されどこれにても、一度は父と子と聖靈の聖き名に入れられて頭に水をそゝがれたるもの、まさかに頭をおろして南無阿彌陀佛の題目を唱へ佛弟子となるも快からず。是に於てか我れ以爲らく、かの基督教會の一派なる天主教に轉じ、尼となりて其庵室に籠り、常に永貴貞女マリアの聖像に對して思をひそめ、時には情ある懺悔僧の「爾の罪容るされたり」とのありがたき御聲を聞いて心に安んずる所あらば、一には社會の喧噪を免れ、之と因緣を斷つを得ると共に、また我が基督信徒たるの自覺に對して疚しき所なきを得、所謂一擧兩得の策なるべしと。俄に思ひたちたる如く、意を決して天主教徒に改宗すれば、社會の同情に乏しき、我れが轉々苦悶の結果の其の此處に至れるを洞察すること能はず、却つて好奇の念の驅る所となれりとなし、輕薄の極、浮氣のきはみもこれに至りて其絶頂に達せりと嘲る。われ今幽界にあるも此無情なる嘲聲罵言を耳にする毎に未だ曾て暗涙に咽せばずんばあらざるなり。あゝ！我れ

何ぞ自ら好んで有髪尼とならんや。實に……實に止むなきに出でたるのみ。』また〳〵暫くは情知らずの松籟に、その言の葉を遮られしが、幾何ならずしてまた聞こえ始じめたり。『………されど人は如何にすまし込めばとて、到底愛するものなくして生き得るものに非ず。若し之れありとせば胸中活火なく熱血其血管に迸らざる菜食動物の流のみ、何ぞ之をしも人といふべけん。亦かの己が心身を聖き女神の祭壇にさゝげて愛慕せる情人を失ひたる人の如きは、恰もこれ賭場に出でゝ其所有を奪はれたる仕事師に譬ふべきか。されば其第二の勝負によりて前の失へる所を復し、前なる傷を療して、心の渴を醫やさんと欲するの念切りに起り、第二の友を得んとしてあせるが如き、これ實に人情の自然に非ずや。然るに杓子定木の道德家先生ども、この熱情に何等の愛憐をも寄せで、一滴の涙をも涙がで之を罵るなり………』。其佳人の靈が何故にかゝる言をなすかを訝りつゝ、思はず身を震るはして涙に袖をぬらせば、我れは再び我れに返へれり。然れども之と共に魔術は破れ、佳人の影は消えうせぬ。去りし處はいづら天堂か、地獄か、將た連獄か。

何時の間にか東の空もよう〳〵と明け渡りたれば、いざやこの所を去りなんと立ちあがるに、彼方の小暗き隅に悄然として一小十字架の立ちあるを知る。近づいて之を凝視すれば、書してアンナ之墓と題す。あゝ！この佳人、抑も亦、何等怨恨の情、綿々として斷えさるものを以て、他緣の我に訴ふる處あらんとせしなるぞ!!!

割戀の愛

蕉雨

才子佳人天緣全きを得て、共に幸福なるホームの人となり、良夫は外に竭くし、賢婦は內に努め、聽ては子女其膝下に侍して、團欒緝睦と、關雎の樂しみあり、螽斯の幸ひあり。和氣爰に溢れ、福祉爰に充ち、洵に羨むべきに堪へて、詩人嘆咏の情古今未だ盡きず。斯の如きは實に、この無常迅速にして、而も汚穢罪惡に滿ちたる浮世の中の純潔純美にして、こゝ神の宿れる處、天使の舞樂する處なり。吾人は此美觀を慕ふ。然れども吾人はなほ之にも增して、美なるものゝ、羨慕禁じ難きあり。ライダルの詩仙堂に、終生愛妹ドロテアに侍

せられつゝ、天地の美妙を唫哦したる彼のウォルヅウォルスの如き、或は又其妹と一生を共にして天象の研究に奉じたる彼のハッシエルの如き、兄妹友情の至れる、終身共棲の生涯を送りつゝ、慈母の膝下の昔日を續け、無邪氣の愛情に樂みしと、嗚呼優美の長にして、また高潔の大ならずや。

男女相愛せば、君ならではと互に思ひを寄するが自然にして、此處愛情の發して美なる點なりと雖も、義理情念の爲めに、我情の制し難きを制して、情人を他に與ふると、亦美の尤なるものと謂ひつべきかな。吾人嘗てエッオット女史が『アダム、ビード』の雄篇を讀む。セスはビードが舍弟なり。一人の賢女と交情厚し、然るに舍兄の情人は、薄志弱行の女子、誤りて罪科を犯し、命運刑場の露と消え、ビード是れより怏々樂しまず、其母之を憂へ、セスの情人に逼りて、彼と婚せんことを懇望す。爰に至りてか、兩人は情緒切々なるものを僅に斷ちて、彼婦はビードが妻となれり。セスは終ち一生婦を迎へず舍兄と、前の情人との子女を守りして、樂しみを求めたりといふに至りて、人の爲めに我情を割くとの、如何にも高尚にして、優美なるに感歎して止むと能はず。今なほ

時々之を思ひ出でゝは、セスが心事を推慮すると、作家未だ言はざるの處にまで及んで、自己の想像に滿腔景慕の情を致すとあり。他の爲めに我情人を、與ふるの事、吾人は素より理に於て頗る矛盾せるを見る。然れども多くの美觀は、物の矛盾する時に於て生し、さる美觀中、この如き矛盾の美觀は玄妙またいふべからざるなり。假令道理に損するとありとも吾人は甚だ如斯きの美を慕ひ、時に自ら此美を實にせんとを思ふ。

雪何を以て美乎

かもめ

春未だ淺く、天泡雪を降らすとしきりなり。滿庭滿樹白皚々端居の眺望頗る佳美。坐の一人感嘆して叫ぶ、吁美なる哉、雪何を以て如此くに美なる乎と。予また思ふ、雪何が故に其美景をなすやと。胸底忽ち之に應ずるの答あるを聞く、曰く雪や其皓潔純白なるベールを織りなして、地上よろづの穢れを包むが故に美なりと。凡そ己れの潔きを以て、他の醜きを蔽との美は、宇内の至美なり。雪景尤も美なるの妙理、亦爰に在る哉。

若松の落葉

若松しづ子哀悼の悲韻

追悼のうた

三宅花圃作歌
納所辨二郎作曲

花は咲きけりさはあれど　鳥はうたへりさはあれど
春のひかりのあまねきを　ともにめでにし人ぞなき
うらわか草のもえぬるを　いもせの中にたぐへつる
君は花野のあきまたで　などたゞ一人かれにけむ
色こくみえしはゝそばを　ちりしものともおもほへで
なほにこ草のにこやかに　なにをたのみてゑめる子ぞ
いづらや君のやどりなる　あまつ御國は遠くとも
今日のこゝろをしらませば　ゆめにもがなとつげまほし

寄松懷舊

湯谷紫葒作歌
シヤクソン作曲

千代のためしにひきてうゑし　いはほのもとのわかまつはや
まつのつゆかわが涙か　しのぶたもとのかくはぬるゝ
みどりのいろのにほひふかく　影をたのめしわかまつはや
ゆきにもをれず霜にもかれず　きよきみさをのわかまつはや
焼野がはらにあれしかぜを　いたみてをれしわかまつはや
あだ木しこ草しげれる世に　よろづよかけしわかまつはや
かげをたのみしみばへの松　いかにせよとかわかまつにや
よりて生ひにしいはのもとを　いかにみよとかわかまつはや

若松賤子の君を志ぬびてよめる

戸川殘花作歌
無名氏作曲

いとはしき世とたがいひし　はなはにほへりとりはなく
おもしろのよや月花は　つねににほふとおもひたり
つねとおもひしおろかさよ　ちとせのいはのまつが枝は
みそぢばかりに枯れにけり　かみはいかなるみごころぞ
さとれとひとはすゝむれど　あさきはかりにしりがたし
まよひと人はをしふれど　まよひもいまはなぐさなり
おろかなりけり君はいま　千代よろづよときはみなく
まことの月をながめつゝ　めぐみのはなをめづるなり

巖本夫人を悼みて

三輪花影

群る山の上たかく　ひとりそびゆる巣守山
夕日に匂ふ峰の雪　塵の浮世にたぐひなく
神の寶座をおもはせぬ
霞の染めし紫の　麓の色もなき人の
深きあいをぞ忍ばする

夕日のなごり西山に　おつればいよいよまさりゆく
山にふくみし愛のいろ　わがたましひをつゝみけり
名殘の光きえはてゝ　この世をつゝむ夜の袖
山の姿はかくれけり

思ひ焦れしわが靈は　はれぬ涙にしめりつゝ
常世のやみにさまよひぬ　情にみてる天地の
などてこよひは情なき　月さへあらぬ樣なりとは
いつしかいたく夜はふけて　風さへふかくねぶりけり
夜ふくるまゝに天地の　父のみたまは世をおほひ

われをおほひて我魂も　塵よりいでし現身の
この世のほだしぬけいでゝ
思ひ焦れしわがたまに　彼の世の愛はみちわたり
したひ〳〵しおもかげも　胸のかゞみにうつりけり
自然のたまは我愛の　花を常世の園にうゑ
こひしき花と同香に　匂はせんとの情より
塵よりいでし空蟬の　まがき一重をとりさりぬ
かくて自然の愛の手は　わが靈をみちびきて
彼の世のたまと通はせぬ
君はいまいかにながめていますらむ
殘りし友の袖のなみだを

君やなし

杜鵑

君が夫我とあり　君やなし
愛兒今爰にあり　君やなし
今朝の白雪　君いまさず
庭前の梅花　君いまさず

我等笑ふとあり　君あらず
我等悲しぶとあり　君あらず
いたく君を悲しびて　君遂にかへらず
君もしあらば　此悲しび君と共ならんを
旦に君を懐ひ
夕に君を悼む
アヽ君は逝けり

なき人のまさばいかにとと〳〵に
おもふとのみおほきころかな

なき人をしのぶの草の春ゆへに
いやしげりゆく我おもひかな

若松賤子の君の追悼會に

家永えい子

ほたるに雪に　みがきてし　心のひかり　かくれねば
言葉の花と　咲匂ひ　みちのしをりと　世にたちて
ひらけ行く代に　仰がれつ　みちゆく友に　したはれつ
年波いつか　たちにけり

思へは夢よ　世の中は　思へははかな　世の中は
きみがこの世に　なすわざの　登る朝日と　末遠く
晴れし春日と　のどかにも　あらましものを　あなうたて
まがつ神にや　ねたまれし　にくきあらしや　さそひこし
いたつきおもく　そが上に　きみがいもせの　年月に
かたみに心　つくしてし　學びの家は　何事ぞ
かぐつちの神　おそひきつ　もゆるほのほの　おほひつゝ
たちまち家は　やけ土の　むなしき跡と　なりにけり
きみがこゝろを　おもへ人　きたへ〳〵し　くろがねを
とかす熱さも　あるものを　君がかよわき　身になどて
かゝる重荷の　たふべしや　いたづきいよゝ　たけりきつ
かたみに千代を　ちぎりてし　いもせの道も　ともならず
庭のをしへの　なでしこも　殘していそぐ　死出の旅
きみのみひとり　さきだちぬ
いまはこの世に　なききみを　今日諸共に　忍ぶ草
つゆいとしげき　つどひかな
さはわれきみは　天つ代に　さそふあらしも　いまはなく

うきのしらなみ　跡きえて　天つゝかひの　かなづらん
うたにたのしく　こゑあはせ　かるゝとなき　樂園の
ときはの春にや　すみぬらん　ときはの春にや　すみぬらん

おなじく　　　船越艶子

さりにし人のおもかげに　かよふ子供を見てもなほ
しのぶは君のことぞかし
いとしうなゐになつかしき　つまも此世にみすてつる
心やいかにのこるらむ
さはさりながらこの君の　かばねは土となりぬとも
名はとことはにくちせじな

同上

梅が杖にむすびし實さへそれながら
かれしを見るぞ悲しかりける

いはもと夫人逝くわれの夫人の名を知る久しかつて函館にあるや夫人たま〳〵暑をこの地に避く當時夫人にまみゆるの機を得ざりしと雖も内海夫人はのち夫人の才藻をかたり殊にその英語にたくみなるに驚きぬといひぬこの旅次夫人が乘船九重丸は南部沖に坐礁し夫人いたくなやめりとも聞ゆ回顧すれば已に十有餘年前

陽炎にうたかたのあわのうはさかな

わが婦織江、婦か友木山はる子ともにふゑりすにありて夫人のをしへをうけぬ音問久しく絶えしと雖も夫人をしたふの念わするゝなし夫人逝くこれがをしへをうけしもの誰かなかざらんや

梅ちりて窗の火影のしのばるゝ

夫人著譯多しわれのわけて愛讀しゝもの雛よめの一章とす一片の同情善治大人によす

紙雛の對をなくせしあはれさよ

夫人紀念會の日　　　岡野知十

拜呈益發氣に相向ひ候處諸君益御清適奉大賀候
今般諸君御發起にて若松賤子君追悼會御催し被成候段新紙上にて承知仕候余元來同君とは一面の識無之候へ共文壇の爲大に惜まざるを得ず一滴同情の涙を濺で爰に拙律一首を呈し以て追悼の意を表し申候に付宜敷御取計らひ被下度候不一

明治丙申春季皇靈祭當日　　香陽　宇山貞拜（相模國大住郡秦野村の人）

哭若松賤子君

春寒酒醺碧將凝、多恨多情無慰憑、衫影香奩蝶邊夢、笛聲粧閣雨霄燈、海棠花落腸將斷、楊柳絲枯恨頓增、烟月蒼茫魂不返、雲鬘何處寄紅冰、

悼　巖本夫人　　芥舟木村毅

曾倚玉皇香案邊、再歸天上亦前緣、月明繡幌梅花白、朗々猶聞誦妙篇、

巖本嘉志子を悼む　　大和田建樹

いかならむやちよちぎりし言の葉の
　ともなきやどのともし火の影

いにし年建樹がつまうしなひける時ねんごろにとはせ給ひしとなど思ひ出でゝ

身ひとつのものとおもひし夢のよを
　またくりかへす君もありけり

巖本嘉志子君をいたみ侍りて　　三輪田眞佐子

あふぎつゝ高根の雲とみし花の
　ちりてしのちのしのばるゝかな

閑居落梅　　加藤とし子

かくれ家のあるじゆかしき梅の花
　ちりてのこれる香こそたかけれ

嘉志子君のむかしを思ふ　　同上

花の朝月のゆふべはとさらに
　ありしむかしをしのばれにけり

かし子とじかなきあとをとふらふをりよめる　　古市しづ子

はなとりもともにとかねておもひしは
　わかれぬさきのこゝろなりけり

きみしいまちりゆくはなとまづしらは
　あさなゆふなに見るべかりしを

巖本嘉志子の君を悼みて　　樋口夏子

訪ばやとおもひしことは空しくて
　けふのなげきにあはんとやみし

おなじく　　湯淺節子

花ならばまた咲はるもあるものを
　ちりてし人のをしまるゝかな

おなじく　　雑賀あさ子

しるべする君はかくれてたまほこの
　みちふみまよふきのふけふ哉
なみ風のあらきうき世をはかなみて
　あまのぼりにし君ぞこひしき

若松賤子の君のうせ玉ひぬときゝて　　金子薫園

世のちりをいとひて君は久かたの
　あまつ御國にのぼりましけむ

おなじく　　田龍章堂

としとにさかえゆくべき若まつの
　ふみの林になきぞ悲しき

若松賤子の君のみまかりたまひしをいたみて　　村松鍬三

若松のかげをしめたる花なれば
　盛りひさしと思ひしものを

同じ君の追悼會によめる　　仝

ありし世の君をおもひてかなしきは
　けふの集ひにつどふなりけり

恭ク故巖本嘉志子君ノ靈ニ告ク余ハ君ノ須臾ナル一生モ女子トシテノ事業及ヒ婦人トシテノ職分ニ於テ欠グルナシト信ジ深ク欽仰ニ堪ヘザル也

明治二十九年三月二十一日　　田口卯吉

今を距ること十三四年の頃と覺ゆ。横濱山手のフェリス女學校に英語演習會あり。こは練習と娯樂とを兼ぬるの催にして教員生徒或は朗讀に、或は對話に、或は吟誦に、演說に、各々其得意の技を來賓の前に演ずる者なりき。予も亦校長の招きにより、衆賓の中に列して之を聽けり。此會の終りに二十歲前後の一婦人質素飾なき通常の服を着け、壇上にシエークスピーアの詞曲を誦す。音吐瀏朗語調節に協ひ、目を閉ぢて之を聽くに殆ど國人の外國語を用ゐるに肖ず、宛然英人の其自國の語を操るかと疑はる。滿坐感聽して此會の白眉なりと賞しぬ。其人は同校の助教島田かし子ぬしなりと聞き、此婦人の才常人に超るを知りぬ。是れ予が君の名を聞くの初めなりき。

其後數年都下の文界に若松賤子の名出で、婦人作家の譽高く、特に其文詞の純潔に、鄙猥の氣絶えて無くして、其敎養の淵源極めて淸きを思はしめたり。此閨秀は巖本善治君の令室にして先きのフェリス女學校助敎かし子の君なり。其嘗て講堂の聽衆を感せしめたる者、今は文名都下を動かして、巾幗社會名家の一人と稱せらる。

されど君は唯才を以て稱せらるゝ婦人にあらず。其良人巖本君は夙に女學を起すを以て自ら任じ、我國婦人の位置を進むるが爲に身を献ぐるの人にして、かし子の君が巖本君に嫁がれしより、家庭を整へ、兒子を訓へ、良人をして内に顧るの念無く、一意敎育事業に心身を委ぬるを得せしめたるは、其内助の力文界の名に比して、更に嘆稱するに足る者あるを覺ゆ。君にして強健生長永く良人を助けしめなば、我國敎育の爲めに著き補益あるべかりしに、惜むべし、秋蘭霜に摧け、春花風に散じ、空間に遺芳殘影を留たるは豈に悲惋に勝ふべけんや。然れども人の志は形と共に朽つる者にあらず。君が學に力め業を勵み才華文界に秀で、良妻として内助の力あり、慈母として煦育の恩あり、久しく疾に瘁みて精神益々健に、心靈進修の功を、卒するの際まで積まれしは知る者の皆稱する所、君を欽ぶ者をして倣ふて勵まんとを思はしむ。人を死後まで奬勵し、隱然良人敎育の志を助けたると、眞に感ずべきなり。予は巖本君が家庭に此良友と好助敎とを失へるを悲み、又夫人の感化勢力其形骸と共に消滅せざるを感嘆す。明治二十九年三月二十一日、夫人生前の親友相計りて追悼の會を營まるゝの擧あり、予も亦參會して一言志を述べんとを冀ふも、公務の時間に支へられて果すと能はず。乃ち夫人の生前に見る所の一二事を記し、且所感を併せ附して追弔の詞に代ふると云ふ。

明治二十九年三月二十一日　　島田三郎

○我國の女消息文

左は米國の女子大學にある某女史の書信の一なり。

奇妙の感事ですが數日の前 "Engé nie de Guérin" を讀みましたとき、日本の婦人はどうも手紙なかなかことが下手だと感じました。新紙の上で見られるやうなとは、或は雜々と字句にならべられ候ふとも、綴密な婦人のかきさうなる、細い平凡の一家内一小社會の日々の出來ごとを能く面白く手紙の上にかき得る婦人は稀也と感じました。

このユウヂーにつき感じた事は數多ありますが、就中彼女と彼女の弟との情誼なりしことにて、其弟のモーリスが他に遊學して居つた間又其後巴里に居つた間

互ひに音信いたしまして、其音信の文面に著はれて居る、細かなる情がよく優に述べられて居ること、しかも其文面中の事柄です。其事柄といふは、何でもない非常な英雄めいたことでもなく、雑々しい新紙屋の論辯めいたことでもなく、家の丁稚や、猫や、家鴿や及田舍のおぢいさんや、おばあさんのことや、及質朴な百姓共の日曜日のことです。

わたくしは考へ過つて居るかは知りませぬが、日本の婦人の手紙には、まづ失望します。まづ平たく、自分が他郷に旅寓して居るとして、遥る〲五六千里もある所から來る手紙を讀むときには、幾多の感情と望みを持つて封を切られたると云ふことをば察しなさらなければなりませぬ。これは新年の手紙であらう、彼地の雪景色は如何に、正月の祝餅は如何に樂しまれしか、皆々は悦しく迎年したであらう共に正月を過た時にはかうであつた、いや、かうではなかつたなど、色々隣りのおかみさんのことや、町の小供のこと迄、又年老いし蚕處のぢいばゞの事まで、孤客の頭に想起させます。扨文を開くとどうでしよう。慇懃い字できまりきつた、新年千里同風何々と云ふやうな、數行の文章で、それきり、雪がふつたんだか、どうしたんだか、何んだかさつぱりとわかりません、しかも赤手紙でもなく、端書で恭賀新年などゝ、月日と名前を添へて、數千里外の人に送るとは、それを手にとつたとき、馬鹿げたる！と云ふた口が、ふさがりませんかつた。國家の爲に外を家とする男の方とか申すなれば、わたくしは何とも申しませんが、若い女で文學を專門にして居るといふやうな人が、手紙の價値を粗にして、筆も下手で文味も意想もないと云ふに至つては、なんだ〲と泣かれる程に感じます。

私は新年の手紙のみ例に擧げましたが、外の手紙もまづ同様の感事がいたさぬとは申されませぬ。婦人の手紙と云ふものはかやうのあら〲しい者とは違ふと存じます。どうして日本の美術に富んで居ると云ふ婦人が此の手紙のことにうとくぬけて居るのでしよう。そうじてかくきまりきつた手紙か又は新聞屋みたやうな大味の外に著はれたと計りしかかけぬのでしよう。或る人が私に或日かく語られました。『あの御方から來る手紙は夏來たんでも冬來たんでも同じことだと』實にうがてる言葉だと存します。春の月も、夏の夕立も、日本の婦人には別にかゝはりはないのでしよう。一家の内にある人ならば又一層、四季の祝節。家の庭園、村人、其の珍らしき動靜、飼犬、其他種々様々のこともあるべし。よく雅艶なる文に綴りて面白かるべく遠方の夫に送りて、家内鄕里の温風に接せしむること、實に婦人の書簡中にかゝれて其花となるべきもの數多ありますと考へます。平常眞味に考へるのではなく、題をもらふた時々のみ鳥渡頭をしぼる、かの國家を如何せんとか、女子の責任とか何とか云ふやうな無鐵棒な空文のみ綴らずして眞に遠客を慰さめ、あら〲しき男にも家のあたゝまりを自然に感ぜしむると云ふやうな音信文に少しは注意をしていたゞきたいとは實につまらぬわたくしの獨言です。あなたはどう御考へになります。

春の試驗はすみました、佛語も科學も皆及第いたしました、科學の實驗と三角術には「クレデット」をとりました。ミス、メマスの文學の組の點は來たかわかりません。生徒が多いから何分七八十名もありますから一ヶ月もたゝればわからぬと云ふことです。

英文學の組にて當季の參考書に用ゐしもの左の如し（文學を志す方のため或は便利かと存じまして）外にもありますが概して

Lounsbury's History of Eng. Language.
Whitney's Life and Growsth of Language.
Romanes's Mental Evolution of Man.
Tayler's Origin of the Aryans.
Schrader's Prehistosic Autiquities of the Ariyan People.
Matthew Arnold's Celtic Liter ature.
Morley's Eng. writers.
Grant Allen's Anglo Sexon Britain.
Green's History of the Eng People.
F. Y. Powell's Early English.
Church's The Begining of the Middle ages.
Skeat's Principles of Eng. Etymology.
Sweet's Hand Book of Phoneti cs.
Max Mullen's Science of Language.
The viking age.
Corpus's Poeticum Boreale.
Matthew Arnovd's Boldeu Dead.
The Younge Edda.

長岡護美子菜處に「女子の教育」を演説して曰く

何事も能く實際上に就いて考へて昔と今とを忘れずして、即ち万事の改進を斗るべきなり。然し漸進主義で通すより外に女子教育の道はあるまいと思ふ。

◉女子教育偶感

教師の問に應じてためらひ仲々に答ふることの遲き生徒のありとも、夢々せくこと勿れ。いつまでも其口を開くを待ち居るべし。遂には發言答辯するに至るものなり。意外にも此種の答辯に正を得たるもの多し。(たけ子記)

◉女子就學の僅少なる理由

秋田縣にては昨年六月縣教育會あり、「學齡女兒の就學數僅少なる理由如何」と題して意見を徵したるに各員の陳述せし所左の如くなりしといふ。

一就學督責規則を勵行せざること。
二現今の教則は男兒の爲に設けたる如く、女兒には必須なる學科を輕視せること、從て其教則は女兒に不適當なること。
三前項の結果として、學校卒業後も家事經營上教育を受けざるものと徑庭なきこと。
四市町村に就ては就學督促をなすに、女子を督責するは男子を督責するが如く嚴ならず。
五學科の男女別ならざるによる。
六女子に必須なる裁縫科輕きに失す。
七女子の爲に教則を設けざるによる。
八女子特種の薫育を度外視したるによる。
九男女教室を區別せず、又女兒と男子と同じく椅子に倚らしめ平座せしめざること。
十授業時間現今の女兒に適せず。
十一女子には生活上教育なきも差當り差支なしとの誤解をなせること。
十二舊來の弊習により、父兄が女子教育を無用視す。
十三近鄰の惡習慣誰々の子弟は就學せしめぬ故自己の子弟も出さずといふこと。
十四子守留守番食事調理の補助等家事の補をなさしむること。
十五母親が深く舊慣に泥み居るの結果、即ち母の教育の行屆かざること。
十六見苦しき衣服を纏ふて出校するを恥づること。
十七農家は大抵かて飯(米に他の穀類蔬菜類を雜へ炊くもの)を食するも行厨には之を携へしめ難しといふこと。
十八富の程度低きによる。
十九各府縣と交通不便なる爲、刺戟を受くること少なく舊藩時代風を墨守し居るによる。
二十早婚の弊あること。

又先月の愛媛教育雜誌を見るに同問題に關し、其原因として指摘したるものあり。即ち

一一般の父兄が女子の教育を必要とせざること。
二貧者にして授業料、書籍代等に耐へざること。
三女子は間接に父母の職業を助くること。

等なりとす教育者の宜しく一考を煩はすべき所なり。(『教育時論』第三百九拾貳號)

◉音樂者と指環と

われ一夜青年會館の音樂會に聽く。時にヴ井オリン及胡弓の演奏者中指環をかくるものあるを見る。指環は果して手指の運動及その勸能に何等の影響をも及ぼさゞるものなるか頗る疑ふべし。音樂者と指環と、これ暫く一考を煩はすべきの好問題たらん乎。(有奘記)

新刊書

◉女子教育

著者成瀨仁藏氏は、大坂梅華女學校に、新潟女學校に、多年女子の教育に從事し、其后米國に渡行し諸大家に親炙して精かに女學を研究せられたる人也。こたび、題號の書を新刊し、歐米名家の論證を豐かに引用して、女學の現狀態に對する

意見を發表せらる。第一章、女子教育の方針、第二章、智育、第三章、德育、第四章、體育、第五章、實業教育に分ちて、仔細に精緻の論を盡す。此類の書に於て未曾て有らざるの確實豐富なる論材を有す。就中、體育の一章は、ことに斬新の實見多きを覺ゆ。美育の一章を欠きたるは、少しく憾むべし。要するに、女學漸やく挽回するの今機に際して、如此良著作を吾學界に得たるは祝す可き限りなり。

◉岡山孤兒院年報

明治二十八年の年報なり。此年同院に於ける數回の大試錬あり。石井君實擊の日記文中隨感隨錄の筆の跡、天下の同情洶くが如く之に集まりたる一種の奇跡の形歷など、深く翫味すべし。蓋し此類の書は、公刊書中の特有のものなれど、尋常讀書社會は、つれに之を等閑視するの過まちあり。此良書僅に郵稅四錢を投じて求め得らるべし。

◉戀愛の福音

警醒社版

著者加藤直士氏序して曰く『客あり余に問ふて曰く、君何の爲に此著を爲す乎と。余之に應へて曰く、是れ余が天職の一部と信ずれば也』と。即はち、戀愛論、基督教と戀愛、（總論、基督の發達、基督の天職、基督の肉体、基督の心情、基督の境遇、）基督と女性、の四章を說き去つて、遂に第五章「基督の割戀」に及ぶ。旨々沈痛、血あり涙あるの文、故に能くキワドキ邊に迄で論及して而して毫も莊嚴の体を失はず、遂に讀者をして首肯して而も戀愛の神聖を認めしむるもの、豈に夫れ筆を天職の戀愛に起し、慨然として其福音を宣べんとせし意氣の迸はしるものあるの故に由るにあらずや。

尋常中學博物示敎

長坂寺田兩氏編
敬業社發兌

要するに著者哲學思想の欠乏は、本書をして動植礦物界相互の關係及其普遍の理法を叙述するに不充分となし、之を無味乾燥のものたらしめし如し。然るに著者が其序文に於て『己れ頭腦の智識を盡し完全網羅の大篇を作出するに至る』といへるは不遜の甚しきものには非る乎。尙ほ一言す、この種の著書に少く生理學の初步をも加味しては如何のものにや。卅章に於て動植物の關係のみを說て之と礦物との關係を爺にせざるは遺憾なるも卅一章の人類篇の如きは是迄まれに見る所なり。

◉血の涙

春陽堂版

弦齋子が、時世の憤慨を寓意するの作といふもの。

時文

再婚と貞節との關係

元良博士の有情なる、多恨の寡人に同感を寄せて、無益なる制裁の形式を破棄せんとて、一のエマンシペーションを起草す。蓋し、有夫の寡婦もあり、寡婦の有夫もあり。念々夢に恨んで、朝たに人生の冷やかなるに歎ずべき、多情寡婦も亦た尠なからず。此文の如きは、即はち一種の救を與ふるもの也。

「日本」週報の和文

意とせざりき「日本」週報の紙上、近ごろ正統記の文を見んとは。氣骨あり、品藻あり、束冠して直言する都人の雅趣を知らんとするものや見よ。

近頃の文學論

扨も變遷の迅速なる文界かな、數月暫らく讀まざれば、新しき文藝間の出處すら不分明となり、頓に時世に後る。嗚呼、近時文界の新才、何ぞ其の出ることの速かなるや。

男女の關係と敎育

博士渡邊龍聖氏之を論じて綿々諄々、「詮ずれば一夫一婦の義行はれずんば、家庭教育の十全を得がたき」といふなり。

國家殿

藏原惟廓博士、國家殿を建設して國民統一風教の本源たらしむるの新案を懷抱すること多年と。如何なる新案か。未だ知らず。思ふに博士もまた香閣たるもの乎。

教育時論

主筆西村正三郎氏故人となり、湯本武比古氏之に代りてより、教育時論の面目一變し、經綸の議論やうやく隱れて、古賢の哲論多く列れらる。

◉福翁百話

人生の富貴に於て其名の相應はしき福翁先生、應機變化の日々論說の外に、敎談道話の一生面を開かんとて百話の端を啓く。文章、着想、双ら脫俗、眞に近日の一美觀たり。吾人は說の追々人事百般の秘訣に入らんことを希ふと云ふ。

時報

◉自由黨婦人會

鴻理板垣伯夫人を始め在京自由黨先輩令閨諸子の團體たる自由黨婦人會は曾て加波山々頂に於て自由の鬼と化したる亡友志士の爲め將に一大石碑を建立して在天の精靈を慰籍せんとす其言に曰く

今や自由黨は至誠相許るし肝膽相照す所乃ち政府と相提携して國家百年の大計を定められんとするは妾等の夙に聞知する所なり而も過去十年の昔しを尋ぬれば悲風慘憺妾等女性としては夢寐猶ほ忘るゝ能はず惟ふ自由黨今日の盛運は亦た彼の加波山上に於ける腥風血雨の凝りて解けざるものあるが爲めに非ずや嗟吁空しく加波山上の朝露と化したる三浦文治、小針重雄、琴田岩松、橫山信六の四氏が專制抑壓の鋒鋩に斃れてより玆に十有一年而かも其墓標は既に朽ちて有れども無きが如く一たび墓前に詣れば暗淚滴りて襟を濕すを知らざるなり乃ち妾等潛越自ら顧みず當年の事を追想して亡き人の爲めに石碑を建立せんと欲す然れども女性の悲しき力自ら其資を出すに由なく故に敢て自由黨の紳紳と廣く同感の諸賢に請ひ幸に其資を得ば以て石碑を建設して聊か在天の精靈を慰むるあらんとす縉紳諸賢若し之を嗚呼の沙汰なりとし叱責し賜はず自由黨今昔の境遇を追思し以て其資を賜はゞ獨り妾等の幸榮のみに非らざるなり願くは妾等の微衷を察し賜はらんことを

◉赤坂愛敬女學校

同校は佛教徒有志者の設立にして十二歲以上の女子を敎育する者學科は普通學科の外に音樂、手藝、裁縫、挿花、點茶等の專門教師あり校舍も淸潔にて尋常科卒業の女子には最も有要なる設立なりと云ふ

◉女學規程

兼て創立計畫中なりし奈良縣高等女學校は愈來る四月より開校の事となり。其科目は普通科、補習科、技藝專修科の三科として普通科は六箇年、補習科は一箇年、技藝專修科は四箇年と定めたり而して普通科一年級及專修科は尋常小學を卒業せしもの若くば之と同等の教育あるもの補習科は他日小學校教員たらんとするものを入學せしむる事とせり。

(東京朝日新聞)

◉慈惠學校と女學校

北海道顯正護國會の事業として兼て計畫ある慈惠學校及女學校は陸續發成會員も增加し新築費も數百圓纒り有志會員は更に奮發し目下道廳へ新築出願中なりと云ふ

(青年國華雜誌)

◉貴婦人法話會

府下在住の貴顯其他紳士紳商の夫人令孃の組織に係かる同會は來る廿六日午後より淺草の本願寺にて通常會を開く

◉若松賤子女史追悼會

閨閣の才人若松賤子女史逝いてより正に五週回忌即ち三月廿一日を以て女史が生前の知友矢島かぢ子、津田うめ子、三宅花圃、五島千代槌子の四女史發起して故人の追悼會を神田美土代町東京青年會館の大講堂に於て開きたり期日に先だち廣く新聞紙に廣告しまた案內狀を發したるが當日は餘寒稍酷しく淡雪さへちらつきたれば思ひ設けし程の來會者なかりしもなほ君子淑女の集り來れるもの殆ど二百名會場には三宅雪嶺氏の揮正に係る若松賤子の肖像及び遺稿を備へ開會となるや女子學院生徒某氏の奏樂及び發起人總代司會者の挨拶祈禱あり次いでカルストフ夫人の獨唱あり橫濱フェーリス女學校教頭星野光多氏は若松賤子及び巖本善治氏

と少年の交際をなしたるの人往時を回顧するの追弔演説をなしミス、ハリソン氏は英語を以て基督教徒婦人としての女史が生前の美德を賛し思軒森田文藏氏は未だ曾て女史と生前一面の識なかりしも「小公子」の譯を以て女史の文學上の才能効勞を墓ふものとして飜譯の至難なるを論じて賤子女史が飜譯の妙腕を劇賞措かずさる秀才の今日溘焉辭世せしを文界の爲めに大に惜しむべきとを悼みたり他にまた寄せ來りし詩歌文章には樋口一葉、三輪田眞佐子、湯淺節子、金子雄太郎、加藤とし子、古市しづ子、雜賀あさ子、村松鍬三、田龍草堂諸氏の短歌、家永えい子、船越つや子、兩氏の長歌、木村芥舟、宇山香陽兩氏の吊詩、岡野知十氏の俳句、島田三郎、田口卯吉兩氏の吊文あり代讀者みな之を朗讀し、倉又鼎造氏は英語の悼文を朗讀したり演說及び朗讀の間には挿むに花圃女史、戶川殘花、湯谷紫莚三氏の新作に成れる若松賤子哀悼歌を明治女學校生徒諸氏が合唱するありてさなきだに故人の逝くを悼慽して來會皆な悵然たるものありしに歔聲の一音一曲腸を斷つて袖を霑せるもの多し星野光多氏の祝禱を以て閉會したるは正に四時半頃なりき因みにいふ賤子女史の遺稿は友人等之を蒐集し坪內逍遙氏等の發起を以て之に對する文界諸大家の批評を乞ひ女史追悼の文をも合せて出板するの運びをなしをらるゝとか又女史は英文に妙を得て其筆に成るもの頗る多きとなるが其文集は既に印刷着手中なほ來月十日發兌のジヤパン、エバンゼリスト雜誌婦人欄（此婦人欄は是迄若松女史の擔當なりしなり）は女史生前の知己外人の追悼文を蒐め且つ同雜誌の此欄を愛讀せし外人中にも女史追悼の意を表し相醵捐して明治女學校新築校舍中に一の紀念室を建築せらるべしと云ふ。（毎日新聞）

◉愚妻病氣に付村會を停會す

廣島縣豐田郡戶野村にては先月十九日村長選擧の爲め村會を召集したるに議長は反對派の面々多く集り到底自派の勝利覺束なきを知りたれば一先づ停會し其上にて策略を講ぜんとて急に使を以て妻君急病の旨を申來らしめ本日は愚妻急病の旨宅より申來りしに付き村會を停止すと言ひ放ち其儘立歸りたりと而して同村會の議事錄には

本日は愚妻病氣に付き町村制の定例により議會を停會す

と特筆したりと空前の珍事とこそ云ふべけれ。（讀賣新聞）

◉米國に於ける日本看護婦の人望

米國の『シカゴ、レコルド』は日本看護婦坂木なつ子と長野ひさ子のとにつき一記事を掲けたりその記事によるに兩氏は兩三年前看護術修業の爲め米國に渡航したるものにて過日シカゴのバプチスト病院に屬する看護婦學校を卒業せられたり兩子が最初該校に入るや校長なる女醫アウスリー失望の手を拱き此少婦等を如何にすべきかと按じ煩へりされど此難問は頓て少婦自ら之を解きぬ昨日（此記事を載しレコルドの日付）に至りアウスリー曰く二子の私利を顧みざる思慮の緻密なる辛抱強くして且つ常に愉快なる皆最も感ずべきことなり又二子は一事に就て二回の質問をなしたるとなく其銳敏なるを驚くに堪へたり坂木なつ子は良家に生れたる由なれども曾て賤しき穢き勤をなすを厭はず不愉快なる業をなすにも曾て猶豫はずこれが爲め他生を勵ませしと尠からず患者の如きも最初は日本看護婦といふに先づ二の足を履み或患者の如きは狂氣の如くになりて坂木なつ子の看護を受くるは嫌なりといひしともありしに百方說き勸めし上試みに看護を受けしめたれば幾許もなくして此患者却て坂木なつ子を放さぬ樣になり夜分交代の時の如き泣き叫びて別れを惜み坂木なつ子の親切は米國看護婦のとても〳〵及ばぬ所なりといふに至れり此患者のみならず一たび此二子の看護を受けしものは一として斯くの如くならざるはなし云々と二子戰勝國の名譽を辱かしめず天晴〳〵。（毎日新聞）

因にいふ坂木なつ子女史は三重縣撰出前代議士伊藤謙吉氏長女にして、明治女學校卒業生なり。目下看護病院と稱する、一種新規の病院建設の計畫中なりといふ。

◉足利友愛義團の公娼新設反對運動

野州足利の熱心なる廢娼論者原田定助氏の主唱に成れる、足利友愛義團は、桐生町公娼新設反對運動を起こし、其意見を廣く有志に分てり、其主旨は第一、公娼は物產を衰微せしむ。第二、公娼は地方の道德を墮落せしむ。第三、公娼は賣淫を盛にし惡疾を蔓延せしむ。第四、公娼は祖先を辱しめ子孫を毒せしむ。第五、公娼を設くるよりは寧ろ高尙の產物を造らんといふに在り。

○群馬縣會　議員半數改撰にて廢娼派多數を占む。一旦蒙りたる縣下の耻辱を雪くと遠きに在らん乎。

エンマ、ウヰラード夫人の傳（某女子）…………救世第十二號

佛教に於ける男女夫婦の道を論ず…………新佛教救世の光（第六十號）

女性の高等教育（森一兵）…………基督教青年（第十六號）

女子高等教育策（服部恒山）…………德風（第四十一號）

小學女生徒健康の有樣（寺田勇吉）…………統計學雜誌（第百十九號）

女學と女子の氣風、女學一頓挫の時代、今日の有樣、上流家庭に於ける迷執…………早稻田文學（第六號）

淫風と女性教育…………反省雜誌（第十一年第三號）

女子の教育（長岡子爵）…………能仁新報（第四百二號）、

竹越與三郎君著

二千五百年史

菊判大本一冊
八百八十頁内外
五月發賣

總クロース用紙純良
製本美麗
定價金壹圓五拾錢
郵税廿錢

日本文學の一大欠典は國史なきにあり、否な國史なきにあらず眞實に史識、史筆を具へて近世科學的の方式によりて編述せられたる歷史なき也、近時史論少しく起ると雖も皆な翩々たる小論文にして二千五百年の興廢治亂を一貫したる大史編なきを遺憾とす、今や二千五百年史出づ初めて此欠點を補ふを得べし二千五百年史は日本建國以來德川氏政權を失ふに至るまで二千五百年間日本國民の生活を描く、而して哲史家の如く、唯だ宮廷の陰謀、將軍勇士の武功を記するに止らず。社會の狀態、風俗、文學、工藝、思想の變遷に論及し二千五百年間、國民の生活をありのまゝに書き出さんと試む、二千五百年史は古今の大勢を畫き、變化を畫き精細的確にして科學的なるに於ては之を評して文明史と云ふを得べし、然れども所謂る文明史の弊や、骨を畫きて肉を忘れ、物質を重んじて人物を輕んず、二千五百年史は即ち一時代の風俗、習慣、政權、思想、凡べて漠然之を畫かず、必らず血肉ある人物の口と手とを通じて、之を畫くが故に一代の思想生活は、死したる遺物にあらず、生ける事實として見るべく、此點に於ては記傳史の躰を具へたり、然れども記傳史の弊や、人物を先として事實を後にし、事變の前後緩急を過る、二千五百年史は、讀者をして常に事實の順を忘れざらしむ、此點に於ては編年史と云ふを得べし、然れども文明史紀傳史編年史の外更らに高尚なる哲學的眼光を有するに於ては哲學史とも云ふを得べし、人若し二千五百年史の史躰を問はゞ、四者の萃を調和したるものと云ふを得べし、記事の配置は最も記者の筆力を見るべき所にして、時勢の中には必らず人物あり人物の中には必らず一個の思想あり、思想の中には必らず之を然らしむる物質的精神的の原動力あり、一個の事を記するや、必ず尋ねて其源頭に到らずんば已まず、忽ちにして戰爭、忽ちにして陰謀、忽ちにして社會的變革、忽ちにして政權の爭奪、忽ちにして文學、忽ちにして思想、忽ちにして習慣、忽ちにして宗教、其記事曆々、歩々、推拓開展の妙を極め、一大册子は、一編の文章の如く、首尾脈絡貫通して、一糸亂れず、加ふるに同時代に於ては、他の國民は何事を爲したるかを說き、世界に於ける國民の地位を知るに便ず、故に二千五百年間國民の生活を畫くこと、恰かもパノラマの如く、讀者をして何時も時勢の中心に立ちて四方を望むの感あらしむ、此書一たび出でゝ『日本國民』とは何者か、何事を思ひしか、何事を爲せしかを知るを得ん、加ふるに其文簡潔にして雄麗、朗々として誦すべし、日本歷史の大典、此に具はると云ふも過言に非ず、欄頭に於ては事變の小なるもの、他人の議論、考證、法令の文、等本文に入らざるものを揭ぐ、此書を通常の印刷の如くせば、一千二百頁に及ぶべし讀者の便を計り、字數を縮めて八百餘頁になせり、紙質純良、製本美麗、家々戶々、文學者も、非文學者も、學者も、非學者も、男女を問はず、必らず一本を具へざるべからず、菊判一册の紙數大凡八百八十頁内外にして、三月中に送金せる人は

一圓二十錢 四月中に送金する人には **一圓三十錢** にて買ふを得べし出版の後は定價に復すべし

發兌

東京新橋出雲町一番地

警醒社書店

日本宗教

第九號要目　三月刊行

㈠宗教も亦た武斷的精神の人を要す　孤劍
㈡スウル城の亡滅と東洋哲學　長井草堂
㈢付空也　井口基二
㈣早稻田伯の宗教談（宗教的東方問題及び我宗教界の將來に就て）
●宗教家は社會心理的問題に着目すべし　東根
●宗教と建築　殘花
●昨今宗教界の二極潮流　希聲
●宗教的生活　門寰
㈤善惡の標準と其因果說に就て雲照師に質す　當智洞
○教界不振の原由及び救治策○宗教的東方問題評論○宗教家と社會の暗黑面○基督人物評（元良博士とゴルドン博士）○宗教の分類○詩と宗教（詩的佛教○詩人的宗教家○宗教と詩想○佛教因果說即是美術）○奈良大會宣言書の價値○墳墓廢止論○基督教主義の學校（衰退の原由、今後の改良）○宗教と開化の進行○所謂唯物說論難○禪論一束（禪は宗教の眞髓也○武士道と禪○參師と工夫○近時禪學界の傾向○近時禪風雜○信仰と道（日蓮宗信仰の支離滅裂）○宗教は非國家主義なり○信仰の階級○佛法有志家の監督○宗教的生活の觀察○救世教主の氣焰㈥新刊雜誌○新英批評○宗教界時事數十件
㈦肖像　加藤博士、押川方義君
一册定價八錢○郵稅一錢○六册前金郵稅共四十六錢也

發賣元　東京麴町區下六番町六番地　日本宗教發賣所

「日本の家庭」は實益と趣味ある家庭の雜誌にして好評天下に高し

日本の家庭

第四號三月一日發行㈠口繪、親子健美なるもの大小二十餘○社說、親子の關係に處する事を考へよ○論說、久松子爵の家庭談㈡外一篇○はなし、蟹と龜の子○小說、伏屋燒（田中夕風女史）㈢遺子（竹下山人）○教育、小兒と酒㈣玩弄物○小兒鼻血持病の話○たのしみ、ぶしやう者㈤遠足の樂○雜錄、同情㈥盲啞學校の參觀㈦歌○家事、嫁と姑㈧外四ッ㈨（其外）衛生問答等あり

每月一回（一日）發行繪入かな附一册價六錢五厘郵稅五厘半年分郵稅共四十一錢一年分郵稅共八十錢送金爲替振込局は飯田町郵券代用は五厘切手にて一割增

發行所　東京市麴町區富士見町二丁目三十七番地　日本の家庭社

明治二十八年　岡山孤兒院年報　全一册　三百五十三頁

目次

第一章　岡山孤兒院の憲法
第二章　岡山孤兒院の現況
第三章　明治二十八年の日記
第四章　明治二十八年院內舉動
第五章　明治二十八年寄附金
第六章　明治二十八年度收支決算
第七章　岡山孤兒院役者及生徒姓名

右印刷成れり御望の方は郵劵四錢御寄送あらば一部送呈致すべし

明治二十九年二月

岡山市門田屋敷　岡山孤兒院

女學雜誌定價表

前金	壹冊價　金拾錢 一年前金　金壹圓　（無郵税）
廣告料	一行　一回　（廿七字詰）　前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年三月廿四日印刷
明治廿九年三月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可

